

# カール・ハウスホーファーと日本の地政学\*

—第一次世界大戦後の日独関係の中で  
ハウスホーファーのもつ意義について—

クリスティアン・W・シュパング\*\*

(石井 素介\*\*\* 訳)

Christian W. SPANG

Karl Haushofer und die Geopolitik in Japan:

Zur Bedeutung Haushofers innerhalb der deutsch-japanischen Beziehungen nach dem Ersten Weltkrieg.

Irene DIEKMANN et al. (Hrsg.), *Geopolitik, Grenzgänge im Zeitgeist*, 2 Bände, 2000.

## 1. ハウスホーファー研究の一面性と多面的な活動との不均衡について

日本は、ハウスホーファーにとって、個人的にも職業上も重要な役割を果たした。これについては、ひとつには、まず彼が日本滞在期間(1909/10年)に直接受けた印象が挙げられる。もうひとつは、彼の人生(それだけではないが)に強く影響することになった、[軍人から]学問研究者への職業転換というアイデアが、彼の最初の著書である「大日本」(1912年)に関する作業の途中ではじめて生じた—実際にはこの転換は第一次大戦のために1919年まで延期されることになるのだが—という点である<sup>(1)</sup>。ペーター・シェラー(Peter Schöller)の“日本はドイツ地政学の原体験であ

りモデルである”と見るべきだ、という発言<sup>(2)</sup>は、まさにハウスホーファーに対して全面的に当てはまる。彼が1924年までの時期—つまり、ドイツ地政学の形成局面に当る期間—に書いた著書の内容が、もっぱら日本と東アジアに関するものであったという事実は、このことを裏付けている。ハウスホーファーの著作を定量的に分析してみると、この元将軍にとって東アジアが特別な地位を占めていたことが確認される<sup>(3)</sup>。1913年から1944年までの期間に、彼は40冊以上の書物を刊行している。再版や増補版を除外して、独自の著書だけに限っても37冊になる。そのうち11冊は日本に<sup>(4)</sup>、さらに他の3冊は東アジアに関するものであり、これらは優にその三分の一に相当する<sup>(5)</sup>。この種の内容[日本や東アジア]の占める位置が突出していることを、さらに一段と明瞭に示すのは、ハウスホーファーの単行本以外の著作の場合である。彼が「地政学雑誌」(*Zeitschrift für Geopolitik*, 以下(ZfG)と略称)に毎月寄稿していたインド・太平洋圏に関する報告を見ると、その約60%はアジアの諸テーマを取り扱ったものであることがわかる<sup>(6)</sup>。

このように東アジアが[彼の著作において]例外的地位を占めるという点に注目すると、これまでのハウスホーファー研究<sup>(7)</sup>が、ナチスの“生存圏”イデオロギ生成に際しての彼の影響の究明に集中していることと、この元将軍の東アジアに関する膨大な論文や東アジアとの幅広い交流との間の食違いを確認することが

\* ここに訳出した論文は、ドイツのポツダムで2000年に開催された思想史学会(Gesellschaft für Geistesgeschichte)の第39, 40回年次大会の発表論文を収録した、Irene Diekmann et al. (Hrsg.), *Geopolitik, Grenzgänge im Zeitgeist*, 2 Bände (イレーネ・ディークマン他編「ゲオポリティク。時代精神における越境」と題する2巻の論文集)の第2巻、「1945年から現在」編に収められた論文(591-629頁)、Karl Haushofer und die Geopolitik in Japan. Zur Bedeutung Haushofers innerhalb der deutsch-japanischen Beziehungen nach dem Ersten Weltkrieg, を訳したものである。ただし、後に述べる事情により、そのうち第7章(621-628頁)だけは、訳出を省略してある。

\*\* ドイツ・フライブルク大学・現在国際基督教大学

\*\*\* 明治大学名誉教授

できる。文献においては、日本はドイツ地政学の手本であり、また、日本はハウスホーファーの大陸ブロック構想の不可欠な構成要素であると解すべきだ、とくりかえし指摘がなされているが<sup>(8)</sup>、それにもかかわらず、地政学にとって日本が持つ意義について取り組んでいる文献としては、モノグラフがたった一つしか存在しない。とは言え、ルードルフ・ゴットシュリッヒ(Rudolf Gottschlich)は、このことに関しては公刊されたドイツ側の一次資料の解釈に集中しており、せつかくの仕事ではあるが、新しい認識はほとんど何も与えてくれないのである<sup>(9)</sup>。

日本における1930年代と1940年代の地政学ならびに政治地理学の歴史に関する叙述の中で、ハウスホーファーが果たしている役割はほんのわき役に過ぎない<sup>(10)</sup>。この理由のひとつは、日本では、ドイツの場合と同様、地政学が1945年以降ひとつのタブー・テーマとなったからである。従って、竹内啓一の諸研究を基礎に据えつつ、日本でより包括的な研究が開始されるのは、ようやく昭和時代の終焉(1989年)を迎えてから以後のことであった。

## 2. カール・ハウスホーファー：はたして彼は“ヒトラーの戦争目標の背後にいる男”だったのか?<sup>(11)</sup>

[ハウスホーファーについての]文献状況を概観しようというとき、彼がアングロサクソン系の同時代人達にどのように受容されたか、という点を見ごしては不完全と言わねばなるまい<sup>(12)</sup>。これらの多くの著書の中では、この地政学者はアドルフ・ヒトラーの最も重要な外交政策顧問の一人として現れる。こうした見方を、ドナルド・ノートン(Donald Norton)は1965年の著書で、ハウスホーファーを“ヒトラーの悪魔的天才(Hitler's evil genius)”と特徴づけることによって、的確に表現している<sup>(13)</sup>。これに類する著作においては、第三帝国におけるハウスホーファーの役割を評価するに際して、彼の持っていた東アジアに関する専門知識、ならびに彼の大陸ブロック構想や日本についての考えが考慮されていた。確かに、これらを基礎として発展した諸見解の中には、拡大解釈が多い<sup>(14)</sup>が、他方、こうした当時のアングロサクソン側のアプローチは、最近の(ドイツ側の)研究文献の場合と比べると、決してそれほど単線的とは言えないのである。

アングロサクソン側の批判がドイツ地政学に取り組みようになったのは、ヨーロッパにおける開戦後のことである。良く知られているように、最初の批判的な論評はイギリス人によるものであった。これらの記事は、ヒトラー・スターリン協定の成立に際して、ハウスホーファーが果たした精神的な代理父親(Patenschaft)としての役割を強調する<sup>(15)</sup>。アメリカの側からは、フレデリック・ソンダーン(Frederic Sondern)の1941年の論文により、第三帝国におけるハウスホーファーの影響力についての過大評価の潮流が巻き起こされることになった<sup>(16)</sup>。ハウスホーファーが、ミュンヘンで千人の所員を擁する「地政学研究所」の指揮を執っている、という憶測や、またこれについての、それが(疑似)学術的シンクタンクと秘密機関的な情報集積所との間の中間的存在なのだ、というソンダーンの仮説は、その後無数の叙述において、無批判に繰り返されてゆくのである<sup>(17)</sup>。

ドイツ国内や日本、さらにアメリカ軍の内部においても、このような研究所が存在するという盲信が拡がっていたことは、ハウスホーファーの遺文書中の手紙によって裏書きされる<sup>(18)</sup>。ところが事実上、ヘルベルト・ルイス(Herbert Louis) [ミュンヘン大学地理学研究室主任教授]が証明している通りであって、ルードヴィヒ・マクシミリアン大学(LMU) [=ミュンヘン大学]地理学教室において、ハウスホーファーは(一度も正教授の地位に就いたことはなく)、実際は一人のアウトサイダーにすぎない状態にあったし、大学院生たちや他の講師達と共に、たった一つしかない研究室に同居せねばならなかったのである<sup>(19)</sup>。

ハンス・W・ヴァイガート(Hans W. Weigert)は、アングロサクソン側からの通常の批判基準とは一線を画した立場をとった。彼は1941年の論文で、ハウスホーファーの思想は、今後起こり得る国防軍の反乱生起の後に、重要性を獲得することになるであろう、と主張している。従って、この元将軍は、“ヒトラーの背後にいる男”(der Mann hinter Hitler)ではなく、(潜在的に)“ヒトラー以後の男”(der Mann nach Hitler)なのだ、というわけである<sup>(20)</sup>。同じく1941年にアントン・ペッテンコファー(Anton Pettenkofer)は雑誌「アジア」誌上で、ハウスホーファーの意図は、ドイツが世界大国となる途上において単に日本を利用しようとする点にあったのだ、という誤った見解を支持している<sup>(21)</sup>。日本をこの

ようなやり方で利用するというのは、たしかにどちらかと言えばヒトラーの人種差別的な世界観にはるかに良く合致するものであった。これに対して、ハウスホーファーの日本びいきの姿勢や彼の大陸ブロック構想は、そのようなやり方とは、明らかに相容れないものであった。

1945年になって、アメリカ合衆国の司法当局がハウスホーファーを重要戦争犯罪人として起訴しようと計画するに至ったのは、とりわけこの様な形で出版された誤った評価のためであったと思われる。しかし結局、この起訴は二つの理由で見送られることになった。その一つは、ハウスホーファーの健康状態の悪化<sup>(22)</sup>のためであり、もうひとつは、この告発を法廷で利用し得るかどうかについて疑問があるためであった<sup>(23)</sup>。これに対して、関係者の間では、ハウスホーファーには原則的な責任があるという見解について、疑問を抱く者はほとんどいなかった<sup>(24)</sup>。

### 3. 主唱者か、助言者か、それとも観客だったのか？ カール・ハウスホーファーと1918年以降の日独関係

ハウスホーファーの「第一次」世界大戦時の将軍という公的地位<sup>(25)</sup>、国家保守主義的な見解<sup>(26)</sup>、ヴェルサイユ条約に対抗する報復主義<sup>(27)</sup>、出生地・居住地が（国民社会主義ドイツ労働者党(NSDAP=ナチス)の発祥の地であり、かつ後の「[ナチス]運動の首都」<sup>(28)</sup>でもある）ミュンヘンであること、大市民的な家族背景<sup>(29)</sup>、ならびにナチス最高幹部達との個人的なつきあい<sup>(30)</sup>、永年にわたる政治情勢についての月々のラジオ講演（いわゆる「世界政治の月例報告」）<sup>(31)</sup>、彼が世間から認められた東アジア専門家であり、その分野での出版物も多数にのぼること、そして彼の大学教授としての名声等々が相まって、必然的に、バイエルンのみならずドイツ全体にわたりハウスホーファーの高い知名度<sup>(32)</sup>がもたらされることになった。このような背景から、一立証可能かどうかの問題はさておき、ワイマール期、そして特にナチス期における対東アジア政策や外交政策に、ハウスホーファーが影響を与えたと考えるのはもっともなことであると思われる。

ここで重要な役割を果たしたのは、ヘス(Rudolf Hess)やヒトラー(Adolf Hitler)やフォン・リッペントロップ(Joachim von Ribbentrop)との関係、ならびに両大戦間期

におけるその他の指導的人物達との関係であった<sup>(33)</sup>。

〔彼の長男〕アルブレヒト(Albrecht)・ハウスホーファーが、一時期フォン・リッペントロップの周辺において占めていた地位や、またアルブレヒトが父親のカール・ハウスホーファーと良い関係を保っていたことを考えれば、この父親の対人接触について考察する際、基本的には息子の政治的つながりをも考慮に入れる必要がある<sup>(34)</sup>。

カール・ハウスホーファーは、同時代の人々の間で、アジアを深く知るドイツでも有数の専門家の一人として認められていた。彼の日本での経験に基づく著作である「大日本」や若干の論文、また彼の博士論文によって、ハウスホーファーは既に1914年以前に日本専門家としての地位を確立していた。〔第一次大戦の〕敗戦後も、軍隊はこの知識を見逃さなかったが、これはハウスホーファーの友人であり、同僚でもあった、オスカール・フォン・ニーダーマイヤー(Oskar von Niedermayer)の尽力によるものであった<sup>(35)</sup>。そのお陰で、1920年代初頭、日本と中国の新聞や書籍が国防軍の手でハウスホーファーに提供されることになったのである。そのお返しにハウスホーファーは、これらの資料に基づいて東アジア情勢に関する報告を執筆したのである。もっとも、当時のドイツにおける超インフレーションに妨害されて、この共同作業はあまり長くは続かなかったが、それでもこの1922年の協力関係は、陸軍部内においてもハウスホーファーが東アジア専門家として認識されていたことを示している<sup>(36)</sup>。彼が東アジアの様々なテーマについて多数の論文を出していることについては、既に前節においてその量的側面から取上げた通りである。そこでここでは、ハウスホーファーが、自ら（共同）編者であり、国際的にも注目されていた「地政学雑誌」(ZfG)の誌上に、1924年から毎月東アジアの現状を報告するフォーラムを提供し、これによって政治世論に影響を与えようとしたことを指摘するとどめる<sup>(37)</sup>。

上述のような出版活動と並んで、重要な意味を持っているのは、日独文化事業の分野の各種の委員会においてハウスホーファーが行った活動である。この元將軍は、「(独日協会(DJG)の、著者C.W.S.の注)ベルリン中央協会の名誉会員であり、また日本研究所運営委員会(ならびに)ドイツ・アカデミー日本委員会の委員」であった<sup>(38)</sup>。彼自身、このアカデミーの創立メ

ンバーの一人(1924/25年)であり、またその総裁(1935-37年)でもあった。さらに、日独二国間関係にハウスホーファーがもたらした影響のもうひとつの側面として、彼の日本における軍人、政治家、学者たちとの個人的交流および彼の在ベルリン日本大使館の幹部との交際関係がある。

ハウスホーファー自身は、自分らを国民の教育者であり、1918年以降の日独関係の(共同)主導者であると見ていた。もともと、このような自己評価を判断する際には、ハウスホーファーの人並み以上の自己顕示欲と、また彼の虚栄心を考慮に入れておくのが妥当である。それでもなお、適切な二国間関係上の雰囲気を作り出すために、彼が果たした役割は注目に値すると見てよいであろう。これについては、当時の新聞もそのように述べている<sup>(39)</sup>。1920年の日独間の国交回復の前後から、やはり何人もの日本人がハウスホーファーのもとに出向くようになった<sup>(40)</sup>。この時代を取り巻いていた諸事情や、当時のメディア状況に照らしてみると、個人的つきあいや、ラジオの講演、新聞の記事、それに(疑似)学術的書物の出版は、今日のマルチメディア世界でのそれらと比べて、まるで違った、つまりこの場合で言えば、数段階高い位置づけがなされねばならないのである。

ハウスホーファーの諸活動は、彼が1918年以降の日独間の文化関係の再構築に当たっての中心人物であったことを証明するものである。ハウスホーファーの役割についてのこのような解釈は、当時の日本大使大島浩中将が、1941年7月11日付けの書簡で認めている<sup>(41)</sup>：「日本は、確かに少なからぬドイツの友人を持っていますが、貴台のように、繊細なる理解力をもってみずから日本人の心情になり切り、しかも、その深遠なる知識の支えにより、われわれ日独両国相互の文化の接近のため、限りなく多くのことを成し遂げてこられたことを、われわれの誇りと為し得るような方は、まさに貴台、高く尊敬する教授殿において、他に一人たりともあり得ないのであります」と。

彼の働きは、最終的には、とりわけフォン・リッペントロプと大島が、ベルリン＝ローマ＝東京という「パワーポリティクスの三角形」を練り上げることになる、そのための土台を用意したのである。ここで、ハウスホーファーが参加したのは助言者・情報提供者としてであった<sup>(42)</sup>。その後の協力関係を決定づける要

素のひとつとなる三国防共協定交渉の丁度その時期に、ハウスホーファーがしばしばベルリンに滞在していたこと<sup>(43)</sup>や、1930年代の中ごろに日独双方の外交官や政治家達と密接な接触を保っていたことは、彼の果たした役割が、単なる蚊帳の外の観客のような地位を超えるものであったことを推論させる。これに対して、[日独の]政治関係の再構築に際して、この元将軍が主導的役割を果たしたかどうかという点については、これまでのところ確証されていない。

#### 4. ハウスホーファーのバイエルン王国軍事オブザーバーとしての日本滞在<sup>(44)</sup>

まず、陸軍少佐に昇任したばかりのハウスホーファーが、軍事オブザーバーとして日本に勤務を命ぜられて来たということ、一すなわち従来繰り返し主張されてきたように、駐在武官として来たのではなかったということ<sup>(45)</sup>を確認しておく必要がある。ハウスホーファーの任務は、1894/95年の日清戦争、1904/05年の日露戦争の両戦役での戦争経験を経た日本人の近代的武器の使用について探るという点にあった<sup>(46)</sup>。このような任務は、比較的多くのプロイセンの将校たちが日本へ派遣されるとともに、日本の将校たちがドイツないしバイエルンへ派遣されていたことに対応するものであった<sup>(47)</sup>。

ハウスホーファーは既に以前から日本人との接触を持ってはいたが<sup>(48)</sup>、彼の日本人との結びつきのうち、たいいていのは第一次大戦前の日本滞在中に根づいたものである<sup>(49)</sup>。もともと、ハウスホーファーがバイエルン王国の最初の日本派遣団に応募する発端となったのは、何よりもこの出張が、彼の好まない駐屯地、プファルツ地方のランダウ(Landau)からの脱出に幾分かでも役立つのではないかと、という彼の私的な思いから出たものであった<sup>(50)</sup>。幾つかの偶然も幸いして、ハウスホーファーは1907年、何人かの応募者の中から日本派遣者として選ばれることに成功した<sup>(51)</sup>。一つには、彼が一友人を通じてこのオブザーバー・ポストの募集公告が出ているのを知ったのは、かなり遅くなってからのことであり<sup>(52)</sup>、もう一つ、彼に出番が回ってきたのは、もともと最有力候補であったクルト・シェルフ(Kurt Scherf)大尉が、上官の同意を得られなかったためであった<sup>(53)</sup>。しかし最終的に、この費用のかさむ派

遣任務への就任を可能にしたのは、ハウスホーファーの義父、G.L.マイヤー＝ドス(Georg L. Mayer-Doss)の財政的援助の賜物であった<sup>(54)</sup>。注目に値するのは、ハウスホーファーが、軍隊における一般的な慣習に反して、夫人を日本に同行する件を押し通したことである<sup>(55)</sup>。これとは反対に、二人の息子、アルブレヒト (Albrecht, 1903年生れ)とハインツ (Heinz, 1906年生れ)は、1908年10月から1910年7月まで、パルテンキルヒェン (Partenkirchen)の祖父母のもとに残留させられることになった<sup>(56)</sup>。

ハウスホーファーの日本滞在の期間は、五つの時期に区分される。つまり、最初の渡航船上期、それから東京滞在职期、私的な調査旅行期、本来の任地である京都滞在职期、そして、シベリア経由の帰国旅行期、がそれである。往路の船上で、ハウスホーファーは、特にシュテファン・ツヴァイク (Stefan Zweig)<sup>(57)</sup> およびキッチェナー卿 (Lord Horatio H. Kitchener)<sup>(58)</sup> と話をする機会を得た。とりわけ、キッチェナーとの出会いはハウスホーファーを魅了した。しかし、ハウスホーファーにとりわけ強い印象を与えたのは航海途中の体験で、大英帝国の姿が、交易基地あるいは艦隊基地の形をとって次から次へと現われてくることであった。そして、その後彼がいつも、イギリスに比較してドイツが持つこの弱点を、ものごとの出発点として考えを巡らすようになったのは、この体験がきっかけとなったのである。1909年2月20日にハウスホーファー夫妻が神戸に到着してから、京都での本来の勤務に就くまでの期間、彼らは二ヶ月にわたって日本の首都に滞在し、その後西南日本をめぐる旅行を行った。兩人にとって東京はあまり気に入らなかったのに対して、田舎の方では古い封建的な徳川時代の日本がまだ息づいているのを体験することができた。この古い日本社会の構造は、ミュンヘンから来た二人のオブザーバーたちを魅了した。日本からの帰途、ハウスホーファーは、シベリア横断鉄道の車窓からロシアの大地の広大さを目に焼き付けることが出来たが、このロシアの大地こそ、彼が後になってドイツと日本をつなぐ結合帯と見なすことになるものだったのである。上述の航海と同様に、この陸路の体験もまたハウスホーファーの考え方に痕跡を残すことになった。

1909年9月1日から1910年6月12日にわたる京都の第22野戦砲兵連隊第16大隊での軍事オブザーバ

ーとしての任期中、ハウスホーファー少佐とその夫人はかつての僧房に居住した<sup>(59)</sup>。ハウスホーファーは語学力の許す範囲で、出来る限り同僚の日本の将校たちと密接な接触を図るべく努力した。もっとも、日本語しか理解しない将校たちの場合には、それは極めて困難であることが解った。他方、ハウスホーファーが後に繰り返し強調しているのは、彼が日本の元老<sup>(60)</sup> および軍の指導者数名と話をする機会を得たという点である。こうした接触を評価する際には、ゴットシュリヒが正しく批判しているように、ハウスホーファーが、つかの間の出会いの後、たちまちの内に親友関係を作り上げるといった特技を持っていたことを考慮に入れておくべきであろう<sup>(61)</sup>。少佐が観桜の宴ならびに観菊の宴の際に“出会った”明治天皇、そしてまた1909年、東京での観菊会の際に握手を交わした天皇が、ハウスホーファーの名簿に“重要で継続的な日本関係” (“Japan-Beziehungen von Wert und Dauer”)<sup>(62)</sup> [を象徴するもの] として書き込まれていたことは、ゴットシュリヒの批判を裏書きしている。

## 5. 日本におけるハウスホーファーの地政学テーゼの受容について

ハウスホーファーの日本における影響にとって、またドイツにおける日本専門家としての彼の地位にとって、決定的であったのは、彼の日本派遣それ自体というよりも、むしろ第一次世界大戦後も彼の日本との関係が継続したことの方であった<sup>(63)</sup>。さらに歴代の駐独日本大使、例えば永井松三、武者小路公共、大島浩等のような、ベルリンにおける日本外交のハイレベルの代表者たちとの新しい接触の構築がこれに加わった。それ以外に、ハウスホーファーは歴代の日本大使館付武官たちとも接触を保っていた<sup>(64)</sup>。こうした結びつきを保つための一つの形は、知合いの日本の指導的人物のところへ、自分の日本関連の著作物を送付するというハウスホーファーの戦略であった。彼の文通を調べて見ると、ハウスホーファーはしばしば日本大使館を彼の著作物の一種の「配布組織」として使っていたことが解ってくる<sup>(65)</sup>。その上、彼はその一部を日本の友人たちに献呈もしていた<sup>(66)</sup>。まさに、この日本の様々な(専門)分野に属する人物たちとの関係こそ、ハウスホーファーが、ドイツの対東アジア政策、ならびに

日本の対ドイツ政策に及ぼした影響について、これまでの研究においてあまり注目されてこなかった側面を表わすものである。两大戦間期の日独間の接触において日本側の知独家をもつ重要性に鑑み、ここでは、とりわけハウスホーファーの大島浩との知己関係のことを指摘しておかねばならない<sup>(67)</sup>。ハウスホーファーが、[第一次]世界大戦後、大島が最初の大使館付陸軍武官代理としてベルリンに赴任したときに知合いとなり、それ以来、大島に自分の日本関係の論文等を提供してきたことは、明白な事実である<sup>(68)</sup>。ハウスホーファーの理念が日本においてどの程度決定的な受容レベルにまで及んでいたのか、という問いは容易には応答し難い問題である。彼の広範な交際関係からして、軍人、政治家、外交官、あるいは学術関係者がその対象となる。問題は、一つには、地政学に関する日本の協会（日本地政学協会）がこれまでほとんど研究の対象とされていないという点である<sup>(69)</sup>。もう一つは、日本では、[第二次世界大戦の]軍事的な敗北から日本の本州占領までの間の数週間に、膨大な量の資料類が焼却処分されてしまったために、地政学の視角から日独二国間の軍事的接触を追跡しようとしても、関係資料の発掘の点で不都合が予想されることである。極東国際軍事法廷の関係史料にしても、そこでの被告の証言の多くが、種々な事情のために、留保付きでのみ利用し得るに過ぎないので、廃棄処分された記録の代わりとしては、全く不十分な代用品にしかならないのである<sup>(70)</sup>。

すでに度々言及した大島浩の他、ハウスホーファーが接触した軍人のうちでは、菊池武夫陸軍中將および遠藤喜一海軍中將との関係が重要であったと思われる。彼はこの両者とは密接な関係を維持していた。前者との関係は1909年までさかのぼり<sup>(71)</sup>、遠藤との関係の方は、同氏が海軍武官として、ベルリンに二度駐在していた時期（1931-34年、1939/40年）に成立したものである<sup>(72)</sup>。菊池は、日本の貴族院議員（1931年11月から1939年7月まで）として、また内務大臣（1940年12月21日から1941年7月18日まで）および内閣総理大臣（1939年1月5日から同年8月30日まで）であった平沼騏一郎の助言者を務めており、遠藤の方も、一時期（1935年12月から1938年10月まで）宮内省の海軍侍従武官を務めるなど、両者とも日本の指導的エリート層の一翼を担う人物であった。こうした潜在的影響力をみると、1934年4月7日にハウスホーファ

ーが自邸でおぜん立てした、ヘスと遠藤との会合も、ひょっとすると、これまで認められていたよりも大きな重要性を持つものであったのかも知れない。とりわけそれが、ハウスホーファーによれば、ヒトラーも承知の上で開催されたものであるとすれば、なおさらのことである<sup>(73)</sup>。遠藤が、このヘスとの会談の三日後に、ハウスホーファーに宛てて出した書簡で「私がこれまで随分以前から待ち望んでいた、あなたの友人（ヘスのこと、著者C.W.S.）との会見」<sup>(74)</sup>と記していることは、日本の海軍がドイツに対してどのような関心を持っていたか、ということを示している<sup>(75)</sup>。この書簡で、遠藤はさらに続けて、「私はそれと同時に、非常に良い印象を受けました。またその際、これまで持っていた様々の不明な点が解明されました。また私は、この会合がわれわれの共同作業にも良い影響をもたらすであろうと、堅い確信を抱いていることを強調したいと思います」と書いている。

1940年9月27日の[日独伊]三国同盟条約締結の後、遠藤はハウスホーファーへの書簡の中で、ハウスホーファーの出版物や日独関係に対する取り組みが持つ重要性について述べている：「貴殿が、永年にわたる疲れを知らぬお仕事を通じて、諸大学において、あるいはまた雑誌や著書において、われわれの共同作業を教導し促進して来た方であることは、貴殿に向かって今更述べ立てる必要はないと存じます。この日独伊三大強国の同盟は、貴殿が地政学の諸論文において繰り返し論究されてきたお考えに全面的に源を発するものであります。長い時間的経過を要したとはいえ、これによって貴殿が懐いていた目標が、具体的な形をとって実現されるものと確信しております。貴殿のご理解並びにご尽力が得られなければ、私はあの時（1934年4月7日、著者C.W.S.）、あの党の指導的人物（ヘスのこと、著者C.W.S.）とお近付きになれることなど、不可能だったでありましょう」<sup>(76)</sup>。

ハウスホーファーと軍人仲間との結びつきの他に、近衛文麿首相（1937年6月4日より1939年1月5日までと1940年7月22日より1941年10月18日まで在任）や松岡洋右外相（1940年7月22日より1941年7月18日まで在任）の助言者たちとの接触も存在した。松岡および近衛は親独派とされていたので、これら助言者たちの理念は、多分彼らの耳に直接届いていたであろう。1941年、松岡の訪独に随行した国会議員窪井

義道は、1941年4月24日付けの書簡でハウスホーファーに相談を持ちかけている。その書簡の中で窪井は、日本のソ連およびドイツとの関係において、地政学的側面が持つ意義について、自分が松岡の注意を喚起したのだと述べている。また、窪井は、ハウスホーファーの著書「大陸ブロック論」を読んでから、三国同盟と日ソ中立条約こそが、ハウスホーファーの大陸ブロック理念の現実化なのだ、という確信を持つようになったことを、次のように述べている：「私は、三国同盟が地政学を踏まえたものである、という確信を持っていますので、国会で外相に対して、われわれは地政学に基づいて、ロシアとも友好条約を締結せねばならない、すなわち、世界平和の創出のためには、大陸ブロックを作り上げることが極めて大きな重要性を持つのだ、ということを表示しました。そこで私は外相に対して、欧州に赴き、大陸ブロックを実現するため、ドイツ・イタリア・ソ連の指導者と直接の接触を図ることこそが、彼の義務なのだという、緊急の助言を行ないました。帰国の途上、松岡外相がソ連との間に中立条約を結ぶことが出来た（1941年4月13日、著者C.W.S.）のは、私にとって特別の喜びであります。というのも、それによって世界平和が促進されたからです。私はベルリンに来てから、あなたの小冊子「大陸ブロック論」を注意深く何度も読み通し、そして、ロシアとの中立条約の締結が、あなたの年来の計画である大陸ブロック論の現実化に向けての一步前進であることを、確信するに至ったのです」と<sup>(77)</sup>。

さらに、ハウスホーファーの考えていることを近衛首相に伝えようと望んでいる、もう一人の擁護者として、亀井貫一郎教授がいた。[第二次世界]大戦後のあるインタビュー<sup>(78)</sup>で、亀井はこの元將軍を、近衛とコミンテルンの代表者の一人（クーシネン O. Kuusinen）に引き逢わせて、大陸ブロックの貫徹をはかるための助力の可能性を問い合わせた、と表明している。ハウスホーファー遺文書の中から見いだされた亀井の手紙類により、両者が互いに知合いであること、および亀井が他ならぬルードルフ・ヘスと会見したことがあること、を確認できるのだが、それだけでは、亀井が大陸をまたいで共同事業を開始するため、実際に1937/38年に欧州に旅行したのかどうか、についての証拠とはなり得ないのである。それよりもむしろ、彼はナチス党(NSDAP)の党構成の研究をしようという意

図を持っていたのではないかと思われる<sup>(79)</sup>。

## 6. 日本地政学の生成に対して果たしたハウスホーファーの役割

両大戦の中間の時期における日本地政学の内部には、二つの対立する潮流のあったことが確認される。京都（京大）と東京（東大）の両帝国大学の地理学教室に、その各潮流の中心が形成されていた<sup>(80)</sup>。東京の側では、結局1941年、日本による真珠湾奇襲の少し前に、上田良武海軍中将<sup>(81)</sup>と飯本信之教授<sup>(82)</sup>の指導のもとに、前述の日本地政学協会が設立された。この会員数150-200名を擁する東京派地政学の小さなセンターは、地政学に興味を持つ学者、ジャーナリスト、軍人や政治家たちの集まる一種の溜まり場の様なものであった。日本地政学協会が設立されるに際して、果たして国民社会主義[ナチス]的指向を持ったドイツの地政学研究共同体（Arbeitsgemeinschaft für Geopolitik, AfGと略称）が、そのモデルとなったのかどうかについては、これまでのところ明らかでない。もしも仮にそうであったとするなら、これは、ドイツのないハウスホーファーの理念を日本に伝える言わば伝動ベルトとして、日本地政学協会が果たした役割に関する興味深い解明材料を提示し得たであろうと思われる。日本地政学協会の中に京都大学の代表者が入っていなかったという事実<sup>(83)</sup>は、日本の地政学界の内部に世界観の相違があったことを明らかに示している。

前節で示唆したように、「イデオロギー的」な観点から見ると、日本の地政学は「京都学派」と「東京学派」に分けることができる。前者は、京都帝国大学地理学教室主任であった小牧実繁教授<sup>(84)</sup>の影響下にあつて、おそらくかなりの確度で、陸軍参謀本部の兵要地誌的(geomilitärische)な企画業務に統合されていたのではないかと思われる。小牧教授は1930年代から反西歐的・天皇主義的な地政学を樹立し、しばしば神道主義の神話でもって、あらゆる科学性を乗り越えた彼方にあるものについて論議していた：「かくして、日本の地政学は、ドイツ地政学の模倣に走る世界の多くの地政学的潮流とは異なるものである（中略）；それは皇統の始祖以来存在してきた、明らかに日本的類型に属するものであり、そして今後さらに皇統の繁栄の線に沿って、真に創造的な日本の科学として発展するである

う」<sup>(85)</sup>と。

東大、報道関係者、日本地政学協会の内部では、これに対して、ハウスホーファーのモデルに従って構成された〔ドイツ流の〕地政学と接触することに、あまり懸念を持ってはいなかった<sup>(86)</sup>。「東京学派」では、自分たちが、神話的・国家主義的な国家観（いわゆる「国体観」<sup>(87)</sup>）と、合理的範疇で充分だとする観念との、中間の道を発見せねばならないという問題に直面しているのだ、と考えていた。東京学派地政学のこのような「自己発見」は、その代表者たちの間にある多様性によって、困難なものとなった。こうしたことから、東京学派では誰がその指導的立場にあったのか、京都学派ほど明確ではない。確かに飯本教授は、遅くも地政学協会の設立とともに、その常務理事として中心的役割を果たすこととなった。しかしながら、これは京都学派において小牧教授のもっていた重要な役割とは比較すべくもなかったのである。

日本の地政学が、独自の専門的指向をもつ分野として発展するようになったのは、ようやく1930年代になってからのことであったが、ハウスホーファーの理念の方は、すでに以前から日本の中で一定の広がりを持つに至っていた。前に述べたように、ハウスホーファーは日本の知人たちに彼の著作物を配布していたし、その知人たちの一部が、さらにその著作物を関心のある人々に推薦することを通じて、彼の著作の読者層は一層増大していたからである<sup>(88)</sup>。すでに1920年代の初期から、ハウスホーファーの論文がジャパン・タイムズや大阪毎日のような新聞に掲載されていた<sup>(89)</sup>。その他にも、1920年代の中ごろから、地政学についての書評や解説が、日本に出ていたことは明らかである<sup>(90)</sup>。この点については、飯本は、最初の〔地政学〕批判者の一人であった。彼は、一方で（ドイツ）地政学における科学性の欠如を強調するとともに、他方では早くからそれが支配の手段としてもつ価値を認めていた<sup>(91)</sup>。このように、地政学への批判と、地政学が持つ有用性への洞察、の両面を結びつける考察は、その後の日本におけるハウスホーファー学説の取り扱われ方についての、いわば前兆を示すものであった<sup>(92)</sup>。日本地政学協会の会員ですら、その多くが科学としての地政学に対して批判的な考えに留まっていた<sup>(93)</sup>。1930年代には、地政学は余りにもあいまいで、体系的では無さすぎると判断される場合が多かったのである。

1930年代の後半から1940年代はじめにかけての時期に、日本では本格的なハウスホーファー・ブームがやってきた。この時期には、ハウスホーファーの日本ないし東アジア関係の著書の大部分が日本語に翻訳された。彼の主著である「太平洋の地政学」の場合、実に3種類の日本語訳が出版されているくらいである<sup>(94)</sup>。しかし言うまでもなく、翻訳よりもっと啓発的な力を持っていたのは、日本語の出版物におけるハウスホーファーの考え方についての解説や引用の方である。たとえば、1941年には浅野利三郎によるドイツ・ソ連・日本の3カ国提携の地政学的意義に関する著書が発表された<sup>(95)</sup>。さらに、1942年にハウスホーファーの著作「大陸ブロック論」を訳した佐藤荘一郎は、1944年には「ハウスホーファーの太平洋地政学解説」と題する書物を出版した<sup>(96)</sup>。このような出版物は、ハウスホーファーの理念が日本で広まっていたこと、ないし普及に努められていたことを示すものである。

ドイツ地政学への関心が1930年代の日本で高まってきたのは、〔日本を取り巻く〕政治情勢の重大な変動に伴うものであった。日本は1931年の満洲占領の後、そしてまた、これとの関連で1933年に国際連盟から脱退してからは、外交政策上著しい孤立状態におちいった。このことは、国内政策の上では、国家と社会のあからさまな軍事化を伴って進行することになった。日本とドイツの（権力政治的）躍進、徐々にその輪郭を現わしつつあった反西歐的方向づけをもった日本の外交政策とドイツの国民社会主義的外交政策<sup>(97)</sup>、ならびに、日独二国間交流の強化の開始などの情勢により、とりわけ日本におけるドイツ地政学の、従ってまたハウスホーファー地政学の、理念の普及が促進されることとなったのである。しかし、日本地政学を开花させるために決定的な推進力をもたらしたのは、まずアンチ・コミンテルン協定により道が開かれた日独「友好」という観念であり、さらに、1937年以降開始された日本の大陸への進攻拡大であった。この動きは結局のところ、1938年の近衛の「東亜新秩序」宣言、さらに1940年松岡によって公表された「大東亜共栄圏」の構想へとつながってゆくのである。

最近の日本における研究では、日本の地政学は、満洲占領と支那事変が進行するにつれて、空間管理政策（Raum-Management）の理論の一形式として影響力を獲得するようになった、との指摘がなされている<sup>(98)</sup>。こ



の場合、地政学の影響を受けた近衛をめぐる助言者グループ、いわゆる“昭和研究会”と、「大東亜共栄圏」建設のための企画立案とのつながりが強調されている。そのメンバーの一人である嶺山政道教授が、日本の膨張拡大をアジア的地域主義の一形式だと婉曲に表現した事は、この研究会の一般的な方向性を反映するものである<sup>(99)</sup>。

地政学の重要性について、日本では、これまで幅広くこのような(兵要地誌的な)大空間の計画立案との係わりにおいて理解されてきた。これに対して、地政学一般、並びにとりわけハウスホーファーの地政学が、日独協力において果たした役割については、日本でも、またドイツでもこれまで等閑視されてきた。このような研究視野の狭隘化という問題は別として、日本の地政学の関心がこの元将軍に向けられていたことや、彼の一連の著作が翻訳されたこと、そしてまたドイツ地政学流の方向をめざす日本地政学協会が設立されたこと、など一連の事実が、日本の学術史上ハウスホーファーのもつ意義を裏付けている、ということを書いておかなければならない。

## 7. 1945年以降の日本地政学の発展について(省略)

[この第7章は、タイトルの通り、1945年以降の日本地政学の発展を取り扱ったものであるが、その最初の注で著者自身も述べているように、「本章は、竹内啓一の既往の研究業績に広範にわたり依存したものであり、著者本人も今後の研究進展を期したいという意向があつて、結局、著者と本誌の編者との話し合いの結果、今回の翻訳からはこれを省略する、ということになったものである。訳者としては、著者の今後の本格的な研究の深化を大いに期待している。]

## 8. ハウスホーファーの著作目録抜粋(日本関係)<sup>(#)</sup>

- Die geographische Grundlagen der japanischen Wehrkraft (日本の防衛力の地理的基礎), in: *Mitteilungen der Geographischen Gesellschaft in München*, Jg.6, Nr.2, München 1911, S.166-188.
- *Dai Nihon. Betrachtungen über Groß-Japans Wehrkraft, Weltstellung und Zukunft* (大日本. 大日本の防衛力・世界的地位・将来に関する考察), Berlin 1913.

\*

- *Der deutsche Anteil an der geographischen Erschließung Japans und des sub-japanischen Erdraums, und deren Förderung durch den Einfluß von Krieg und Wehr-politik* (Diss.) (日本と日本周辺地域の地理的開発におけるドイツの関与、および戦争と防衛政策の影響を通じてのその促進=博士論文), Erlangen 1914.
- *Grundrichtungen in der geographischen Entwicklung des Japanischen Reiches* (Habil.-Schrift) (日本帝国の地理的發展における基本方向=教授資格論文), München 1919. これは 1921年、ウィーンにおいて、*Das japanische Reich in seiner geographischen Entwicklung* (日本帝国の地理的發展) という題で出版された。
- *Landabrüstungs-Ideen* (軍備縮小の諸理念)、「大阪毎日」1922(?) \*
- *Jugenderziehung zu Staatstreue und Wehrtüchtigkeit in Deutschland und Japan* (日独における忠誠と防衛適性のための青少年教育)、「大阪毎日」1922(?) \*
- *Zur Geopolitik der Selbstbestimmung* (自己決定の地政学), München u. Leipzig 1923. J. März との共編、この中にハウスホーファーの論文、*Südasians Wiederaufstieg zur Selbstbestimmung* (自己決定に向かう南アジアの再上昇) を収録。
- *Japan und die Japaner. Eine Landeskunde* (日本と日本人. 一つの地誌), Leipzig 1923, 第2版 1933, 仏訳版 *Le Japon et les Japonais*, Paris 1937.
- *Geopolitik des Pazifischen Ozeans. Studien über die Wechselbeziehungen zwischen Geographie und Geschichte* (太平洋の地政学. 地理と歴史の相互関係に関する研究), Berlin 1924, 第2版 1927, 第3版 1938. \* 日本語訳3種。
- *Der Ost-Eurasiatische Zukunftsblock* (東ユーラシアの未来ブロック), *Zeitschrift für Geopolitik* (「地政学雑誌」) Jg.2(1925), Nr.2, S.81-87.
- *Bausteine zur Geopolitik* (地政学の礎石), Berlin 1928, H. Lautensach, O. Maull, E. Obst 等と共に集団編集によるもの。\* 日本語訳2種。
- *Japans Reichserneuerung. Strukturwandlungen von der Meiji-Ära bis heute* (日本の帝国革新. 明治期から今日までの構造変動), Berlin u. Leipzig 1930. \*
- *The Future of the Pacific* (太平洋の将来), in: *The International Forum*, Vol.1. No.2, (1931.2.15.), p.8-10.

- Gibt der Volksdruck dem Japanischen Reich ein Notrecht auf Erweiterung? (人口圧力は日本帝国に拡張という緊急権限を与えるか?), in: *Die Volkswirte*, Jg.31 (1932), Nr.8/9, S.97-100.
  - *Japans Werdegang als Weltmacht und Empire* (日本の世界強国かつ帝国としての生成過程), Berlin u. Leipzig 1933.
  - Mutsuhito, Kaiser von Japan (日本の天皇 睦仁), *Colemanns Kleine Biographien*, Heft 36, Lübeck 1933.
  - Political Science in Germany and the Far East (ドイツと極東における政治科学), in: *Japan Times*, Mai 1935.
  - Cultural and Economic Ties Link Two Nations (文化的・経済的きずなが二国を結び付ける), in: *Japan Times*, No. 1297 (1935.7.5.), p. 10.
  - *Weltmeere und Weltmächte* (世界海洋と世界強国), Berlin 1937. \* 訳2種。
  - *Alt-Japan. Werdegang von der Urzeit bis zur Großmacht-Schwelle* (古い日本. 原始時代から大国化までの歩み), Berlin u. Leipzig 1938. \*
  - *Fernwirkungen deutscher Geopolitik*. Festschrift zum 70. Geburtstag ihres Herausgebers Karl Haushofer am 27. August 1939 (ドイツ地政学の遠隔作用. 当雑誌編者カール・ハウスホーファー誕生70年(1939.8.27.)記念誌), Leipzig 1939, 740 S. この出版物は「地政学雑誌」(ZfG)1939年8/9月合併号を記念誌にあてたものである。
  - *Deutsche Kulturpolitik im Indo-Pazifischen Raum* (印度—太平洋空間におけるドイツの文化政策), Hamburg 1939.
  - *Japan baut sein Reich* (日本は帝国を建設している), Berlin 1941. \*
  - *Der Kontinentalblock. Mitteleuropa-Eurasien-Japan* (大陸ブロック論. 中欧—ユーラシア—日本), *Kriegsschriften der Reichsstudentenführung*, München 1941. \*
  - 「大東亜地政治学」。これは「地政学雑誌」(ZfG)掲載のハウスホーファーの諸論文を、石島栄・木村太郎両氏が翻訳編纂して出版したものである。\*
  - *Altkultur und Neubau in Ost und West* (東と西の古文化と新建築)、「朝日新聞」(1941.1.1.) \*
  - *Japans Nanyo-Weg* (日本の南洋への道)、「東京日日」(1942) \*
  - *Kulturpolitische Leitlinien bei der Vergleichbarkeit Japanischer und Deutscher Kulturgeschichte* (日独文化史の比較を可能にするための文化政策指針) 東京 1942.
  - *Japans Kulturpolitik* (日本の文化政策), 東京 1944.
- (#) タイトルの中に欠落のあるのは、BA コブレンツのハウスホーファー通信文によるもので、翻訳題名の場合と同様、現物についての確認は未済である。  
\*記号が付いているのは、日本語訳のあるものを示す。
- [注]
- (1) コブレンツの連邦文書館(Bundesarchiv Koblenz, 以下「BA コブレンツ」と略称), NL 1122 (カール・ハウスホーファー遺文書), 第128巻. マルタ・ハウスホーファー(Martha Haushofer)夫人の日記の中に、[スイスの保養地]アローザ(Arosa)での保養期間に「大日本」を着想するに至る事情について、次のような記述がある。「1912年6月16日:しばらく何も仕事をしないでいることが、K(arl)にはむしろ重荷になってきている。(中略) どうすればその重荷を取り払ってやれるだろうか、種々と思索をしているうちに名案が浮かんだ。日本で経験した事を書いて一冊の本にしてみたらどう、と彼を励ましてみるという案である。(中略) はじめのうちは抵抗していたものの、やがて試しに一章書いてみるということになって(中略)、これが、K(arl)の書物生産者(Bücher-Produzent)としての生涯の始まりとなった」と。
  - (2) ペーター・シェラー(Peter Schöller), “ナチス的地政学の発展とイデオロギーに対するカール・ハウスホーファーの役割”, *Erdkunde*, 36 Jg.(1982), 162頁。[この点を将来自分の研究テーマにするつもりだという]予告(同論文同頁の注6参照)に反して、シェラーはその後のこの分野の研究に戻らなかった。シェラー教授の遺文書の中に、著者も確かに計画中だった論文の内容構想が残されているのを見た。  
[訳者注: シェラー教授は、1986年10月トリアーで開かれた歴史家大会での招待講演で、ラッツェル(Friedrich Ratzel)以来のドイツ地政学の問題点についての批判的考察を行った。その内容は、教授の没後、*Erdkundliches Wissen* 叢書第96号として1989年に出版された「歴史の中の地理」という題の論文集に“空間と歴史の間の関係を解釈するための地政学的な諸誘惑—フリードリヒ・ラッツェル以来の種々な構想や理論についての一つの批判的総決算—”という題で収録されているので、念のため付け加えておく。]ハウスホーファー自身、日本は国民(Nation)の学校なのだと度々指摘している。この点については、以下の文献を参照: カール・ハウスホーファー「大日本—大日本国防衛力・世界的地位と将来に関する考察」Berlin 1913年、2頁

- 以降；同「境界の地理的・政治的意義」Berlin 1927年、146頁以降；ならびに同「世界における国家社会主義的思想」München 1933年、44頁。
- (3) この計算の基礎になったのは、ハウスホーファー自身の1906-42年の著作目録である。このリストは、BA コブレンツのNL 1413 (ハンス・アドルフ・ヤコブセン(Hans-Adolf Jacobsen)遺文書)、第4巻、で閲覧できる。
- (4) これについては本論末尾の文献目録抜粋を参照。
- (5) 同上。ここで対象としているのは、1923, 1924, および1939年の文献である。
- (6) 「地政学雑誌」(ZfG)については注(37)を参照。上述のハウスホーファー著作目録(BA コブレンツ, NL1413, 第4巻)には1942年までに約430論文が掲載されている。その内、タイトルで見ると約90編が東アジアないし太平洋のテーマに取り組んだものである。その他、約70編が日本に、また別の25編が中国に関係するテーマを扱っている。これらの三分野のものをまとめると、合計で約185編となり、これは全体のおよそ43%に相当する。不可解なことに、ハウスホーファーは「地政学雑誌」(ZfG)に掲載された記事のほとんどを著作目録には採用しておらず、目録にはその内のわずか11編を掲載しているに過ぎない。ハウスホーファーがこのZfG誌上で発表した記事論文の総数は、—いわゆるインド太平洋圏に関する報告を含めて—約230編の報告のほか、約75編の短文を合わせて、およそ300編余に上るものと推定される。もしもこの報告のすべてと他の短文の半数が東アジアに関するものだとしてみると、彼の著作物の総数が約730編ある内の約440編(つまり60%以上)が東アジア関係だということになる。
- (7) これに相当する文献としては、次の諸著作が挙げられる：マールテン(R. Matern)「ワイマール共和国期および第三帝国期におけるカール・ハウスホーファーとその地政学—彼の思想と活動を理解するための一寄与として」Karlsruhe 1978年。ヤコブセン(H.A. Jacobsen)「カール・ハウスホーファー—その生涯と業績(2巻)」Boppard 1979年。エーベリング(F. Ebeling)「地政学—カール・ハウスホーファーとその空間科学1919—1945年」Berlin 1994年。ならびに、ヒプラー(B. Hipler)「ヒトラーの教育師匠(Lehrmeister)—ナチス・イデオロギーの父としてのカール・ハウスホーファー」St. Ottilien 1996年。
- (8) 上に引用した、ペーター・シュラー：“カール・ハウスホーファーの役割…”(注(2)参照)162頁、の他、ゴットシュリヒ(R. Gottschlich)「ドイツ帝国(1919—1945)の東アジア政策を背景とした政治地理学と地政学に占める日本と中国の価値」、Frankfurt a.M. 1998年、が挙げられる。この著書の218頁では、大陸ブロックこそがハウスホーファーの主導モチーフ(Leitmotiv)なのだ、と特徴付けがなされている。
- (9) ゴットシュリヒは、上記注(8)の著書の主要諸章で、ハウスホーファーの日本関係の著書を集中的に引用している。もっとも、ここではほぼ全体を通して原本文書の活用が欠如しているため、このテーマについてはなお今後の検討の余地が残されていると言えよう。特に著者自身94頁で、日本の地政学ならびにそのドイツ側の根源についての(ドイツ側からの)考察が、なお欠けていることを指摘している。とはいえ、今後の研究のための基礎として、ゴットシュリヒの価値ある研究は、とりわけそのハウスホーファー解釈の点について教訓的である。
- (10) 英語によるものとしては、次の諸文献に言及しておくべきであろう：Y. Fukushima (福嶋依子)：“Japanese Geopolitics and its Background. What is the Real Legacy of the Past? (日本の地政学とその背景。何が過去の現実的遺産なのか)”，in: *Political Geography*, 第16巻(1997), 407-421頁；S. Noma (野間三郎)：“A History of Japanese Geography (日本地理学の歴史)”，in: S. Kiuchi (木内信蔵) (Ed.): *Geography in Japan*, Tokyo 1976, 3-16頁；ならびに、とりわけK. Takeuchi (竹内啓一)：“Geopolitics and Geography in Japan reexamined (日本における地政学と地理学の再検討)”，in: *Hitotsubashi Journal of Social Studies*(HJSS), 第12巻(1980), 14-24頁；同：“Two Outsiders: an Aspect of Modern Academic Geography in Japan (二人のアウトサイダー。日本における近代アカデミック地理学の一側面)”，in: 同編: *Languages, Paradigms and Schools in Geography. Japanese Contributions to the History of Geographical Thought* (地理学における諸ランゲージ、諸パラダイムおよび諸学派。地理思想史研究への日本からの寄与) (2), Tokyo 1984, 89-100頁；同：“The Decline and Survival of Academic Geography: Publications in the Early Stages of Academic Geography in Japan (1907—1945) (アカデミック地理学の凋落と再生。日本のアカデミック地理学の初期段階(1907—1945年)における出版物)”，in: 「HJSS」, 第25巻(1993), 63-68頁；および、同：“The Japanese Imperial Tradition, Western Imperialism and Modern Japanese Geography (日本の帝國的伝統、西欧帝国主義ならびに近代日本地理学)”，in: A. Godlewska (ゴドレウスカ) 他編: *Geography and Empire* (地理学と帝国), Oxford 1994, 188-206頁、における説明を参照。
- (11) 1939年12月11日ロンドンのDaily Express誌上のトムソンズ(G.M. Thomson)の同じ題の論説を参照。
- (12) このテーマをもっと詳しく取り扱うとすれば、補説の枠を超えてしまうことになるであろう。以下に引用する文献を補うものとして、次のような[英語の]モノグラフィーもあることを指摘しておく。すなわち、ドーパレン(A. Dorpalen), *The World of General Haushofer* (ハウスホーファー将軍の世界), New York 1942年；ギョルギー(A. Gyorgy), *Geopolitics. The New German Science* (地政学。ドイツの新科学), Berkeley 1944年；ストロース・フーペ(R. Strausz-Hupé), *Geopolitics. The Struggle for Space and Power* (地政学。空間と権力のための戦い), New York 1942年；ならびに、ヴァイガート(H.W. Weigert), *Generals and Geographers. The Twilight of Geopolitics* (将軍達と地理学者達。地政学のたそがれ), New York 1942年。
- (13) ノートン(D.H. Norton), *Karl Haushofer and his Influence on*

*Nazi Ideology and German Foreign Policy 1919-45* (カール・ハウスホーファーとナチスイデオロギーや 1919-45 年のドイツ外交政策への彼の影響), Worcester/Mass. 1965 年, 56 頁。

- (14) 一例として、ボイケマ(H. Beukema)の、歴史はハウスホーファーをヒトラーよりも上位に等級付けするだろう、という評価を挙げておこう。これは「何故ならば、ハウスホーファーの諸研究があったればこそ、権力政治や戦争におけるヒトラーの勝利が可能になった」のだから、というわけである。これに付け加えて、匿名記事: Geopolitics in College (カレッジにおける地政学), in: *Time Magazine*, 1942.01.19., 56 頁を参照。
- (15) これについて、匿名記事: Hitler's World Revolution (ヒトラーの世界革命), in: *New Statesman and Nation* (London), No.444(1939.08.26.), 301 頁以下、ならびにトムソン(G.M. Thomson): The Man Behind・・・(背後にいる男) (上記注(11)に同じ)をも参照。この記事は、ヒトラー・スターリン協定と対ポーランド・対英・対仏戦争をハウスホーファーの影響の成果であると捉える: 「これは、ハウスホーファーの戦争と呼んでもよい」と。
- (16) ソンダーン(F. Sondem): Hitler's Scientists. 1000 Nazi scientists, technicians are working under Dr. Kark Haushofer for the Third Reich (ヒトラーの科学者達 1000 人の科学者・技師・スパイ連中がハウスホーファー博士の下で第三帝国のために働いている), in: *Current History*, 第 1 巻, No.53(1941 年 6 月), 10-12 頁および 47 頁以下。これはすぐに、アメリカの雑誌 *Readers Digest*, 1941 年 6 月号, 23-27 頁、に再録された。
- (17) このようなテーゼが如何に長生きしているかを示すのは、パーカー(G. Parker), *Western Geopolitical Thought in the 20<sup>th</sup> Century* (20 世紀西欧の地政学思想), London 1985 年、であるが、その 57 頁には、そのような研究所の存在を前提にした記述が見られる。
- (18) 第三帝国側の例としては、1944 年帝国政府報道局の書状 (Horstman の署名入り) が挙げられる。これにはミュンヘン地政学研究所という宛名書きが使われている。さらに BA コブレンツ所蔵の文書(NL 1122, 第 117 巻, 同一箇所, GD 2859), には、日本の医学者で当時の知家であった佐多(A.Sata)教授の 1928 年 1 月 25 日付けの書簡が収録されているが、これにも「ミュンヘン地政学研究所、ハウスホーファー教授殿」と宛名書きされていた。マルタ・ハウスホーファー夫人の日記の 1945 年 8 月 7 日の記述 (同文書, 第 127 巻) は、アメリカ陸軍が「地政学研究所」の存在を信じていたことの最終的な証拠となり得るものである: すなわち、「しかし (ミュンヘン市内コルベルガー街 (Kolbergerstr.) にあったハウスホーファー家の市内住宅の、著者 C.W.Spang の補注) 邸内は、5 月にはまだ完全に無傷の状態であったのに、アメリカ人達の家捜しですっかり荒らされてしまった。架空の地政学研究所を求めての家捜しで、書斎の机や戸棚はこじ開けられ、すべての書類戸棚は

空っぽにされ、書籍類は残らず書架ごと盗まれてしまった」というのである。

- (19) ヘルベルト・ルイス, 「ミュンヘン大学における 1969 年までの地理学研究室の発展」, in: *Mitteilungen der Geographischen Gesellschaft in München* (「ミュンヘン地理学協会報告」), 54. Jg. (1969 年), 21-50 頁。その 24 頁と 27 頁で、ルイスは主任教授、つまり 1935 年までのドリガルスキー(E. von Drygalski)教授とその後継者のマッハチェク(F. Machatschek)教授だけが、独自の管理室を持っていたに過ぎないことを指摘している。ハウスホーファーの学問的経歴の解明に関しては、ハーガー(H. Hager)の、ドイツ地政学の創造者, in: *Heimat und Welt* (「郷土と世界」) - *Münchener Neueste Nachrichten* (「ミュンヘン最新通信」)紙付録, 第 18 号(1939.8.27.), 17 頁以下が役に立つ。ハーガーは、特にハウスホーファーが、チュービンゲン大学とライプチヒ大学からの教授職への就任招聘を、両方とも辞退していることについて言及している。1933 年になって、ようやくハウスホーファーは一多分 [副総統] ヘスの圧力によって一正教授の称号を授与された。もともとそれは無給で、しかも正規の講座を持たない称号にすぎなかったが。その上、この元将軍は引き続きその生活費を年額 9423 マルクの軍人年金でまかなっていた。この点については、彼の人事記録「OP 16443」の中にある年金指示書を参照。この記録はバイエルン州立中央公文書館第 4 部のミュンヘン軍事文書館 (以下「ミュンヘン軍事文書館」と略称) で閲覧可能である。
- (20) ヴァイガート(H.W. Weigert), 「German Geopolitics (ドイツの地政学)」, in: *Harper's Magazine*, 第 183 巻(1941 年), 595 頁。
- (21) ペッテンコーファー(A. Pettenkofer), 「Hitler Means to Destroy Japan (ヒトラーは日本の絶滅を意図している)」, in: *Asia*, 第 41 巻, No. 11 (1941 年), 653-660 頁。
- (22) 彼の心臓疾患については、マルタ夫人の 1941 年の日記の各所にある記述を参照。(BA コブレンツ, NL 1122, 第 127 巻)
- (23) 同所(BA コブレンツ), NL 1413, 第 2 巻。この文書の中には、特にアルダーマン(S.S. Alderman)が、ハウスホーファーの戦争犯罪人としての役割について陳述した、1945 年 9 月 13 日付けの「ジャクソン裁判官宛のメモランダム」が含まれている。アルダーマンは、米国軍事法廷の内部に、果たしてハウスホーファーの行為は裁判になじむかどうか、という疑念が広がっていることについて、次のように陳述している: 「6. これらすべてを考慮外にするとしても、私はどんな実際家に対してにしろ、ハウスホーファーを被告候補に仕立てることに関心を持たせるように努力するとしたら、完全なフラストレーションに陥るだろうと感じています。シェー(Shea)氏とテイラー(Taylor)大佐の両者とも、(中略) 実際問題として、ハウスホーファーが現実に攻撃の扇動者であり、戦争犯罪者であったことを示し得るかどうかには、大きな疑問があると述べています」と。
- (24) 同文書の第 5 項において、アルダーマンは次のようにこのベ

ている：「ウォルシュ(Walsh)神父のメモランダムは、(中略)ハウスホーファーが、その影響が局地に限定されることなく、明白にヨーロッパからアジアをカバーしている点において、一大戦争犯罪人である、という(中略)一般的結論を強く支持しています」と。

- (25) ハウスホーファーの1887-1919年の軍歴の記録については、ミュンヘン戦争文書館所蔵の「OP 16443」の個人文書の中で見られる。この元将軍が世界大戦の経験においてどのような役割を果たしたのかという点については、ゴットシュリヒ(R. Gottschlich)の著書(注8を参照)の77頁で確認されている事実がこれを示している。すなわち、ハウスホーファーは、「彼の所属する『戦場では負けたことの無い』師団からの『一時帰休(Heimführung)』ということで、1918年の末ごろには度々ミュンヘンへ帰ってきていた」のである。ハウスホーファーが反動主義的な軍人グループに根をおろしていたことについては、1922年9月28日付けの一つの書簡がこれを明らかにする。つまり、大阪毎日のベルリン支局代表のクンツェ(R. Kunze)が、ハウスホーファー宛の書簡(BA コブレンツ, NL 1122, 第19巻)で、「ルーデンドルフ将軍とのきわめて貴重な会談について貴下のご援助に感謝いたします」と書いているのである。
- (26) ハウスホーファーが保守的な見解を持っていたことについては、彼の著作から明瞭に跡付けることができる。時にはハウスホーファーはDVP [ドイツ民族党]に参加していたこともある。このことは、カールおよびマルタ・ハウスホーファー夫妻の1921/22年の日記(BA コブレンツ, NL 1122, 第127巻)によって証明される。
- (27) 同じ箇所, NL 1122, 第6巻。その中でも、とりわけ戦争責任の嘘(Kriegsschuldlüge) (DKK)に対抗するドイツ戦争連盟からハウスホーファー宛の1924年6月23日付けの手紙には、1924年6月29日に[ミュンヘンの]クローネ・サーカスを会場として開催される、DKKの大会で予定されていた「生存圏と戦争責任の嘘」をテーマとするハウスホーファーの講演のことが、引合いに出されている。
- (28) 同じ箇所, NL 1122, 第3巻。ハウスホーファーは、大島[浩]宛の1941年2月25日付けの書簡の中で、「慣例の[ナチス]運動の首都で行われる大使訪問の際にまたお会い」したい、と書いている。この定期的な訪問は、ハウスホーファーにとって、在独中の日本代表者達との彼の接触を深めるための、またない機会を提供してくれるものであった。1935年夏の武者小路[公共]大使、大島[浩]大使館付陸軍武官、石井[正美]陸軍武官代理、遠藤[喜一]海軍武官らの訪問の際には、ハウスホーファーは計画や実施に直接参加したのである。独日協会の総裁を務めていたパウル・ベーンケ(Paul Behncke)元提督は、1935年5月23日付けの手紙で、ハウスホーファーに武者小路大使訪問を組織するように依頼している。これは、明らかに日本側参加者の大満足を思っていたのであった。このことは、上記四人の日本代表者たちからの礼状が一律に示している(同じ箇所, GD 2859)。

- (29) H.A.ヤコブセン「カール・ハウスホーファー」(注7に同じ)の第1巻6-9頁参照)。ハウスホーファーの父、マックス・ハウスホーファー(Max Haushofer)は、ミュンヘン工科大学で国民経済学の教授を務め、「地政学の祖父」とも称されるフリードリヒ・ラッツェルの友人であった。著者が現地を訪ねて確かめ得たところによると、マックス・ハウスホーファーの国民経済学や統計学に関する著書が、今日でもなお、多くの日本の大学図書館に所蔵されていることが判明した。ハウスホーファーと同名の伯父(1892年貴族に叙せられた)カール・ハウスホーファー(1839-1895年)は鉱物学者で、ミュンヘン工科大学教授、1889年からは研究所長を務めた。父方の祖父、マックス・ハウスホーファー(1811-1866年)は、プラハの芸術アカデミーの教授で風景画家であった。
- (30) ハウスホーファーは、生涯ナチス党(NSDAP)には入党しなかった。その一つの理由は、彼の妻が「半分ユダヤ人」の出自だったことにある。ハウスホーファーがナチス党や国家の指導者達とコンタクトをとることができたのは、主として彼とルードルフ・ヘスが、俺とお前の間柄を保っていたことに基づくものであった。それは、ヘスが学生時代に大学でハウスホーファーの講義を聴き、たまたま彼が、第一次世界大戦の時ハウスホーファーの副官であったマックス・E. ホーフヴェーバー(Max E. Hofweber)と知己関係であったことを利用して、この元将軍に近づく道を発見したことに発している。ハウスホーファーがヘスに与えた影響については、次の文献を見られたい：スローン(G.R. Sloan), *Geopolitics in the United States Policy, 1890-1987* (合衆国の1890-1987年の政策の中の地政学), Brighton 1988年, 33頁。その脚注22の中でスローンは、ヘスが大战の時ハウスホーファーの副官だったという、間違った見解を繰り返して述べている。その反面、興味深いのは、彼が1978年7月25日に行なった、イルゼ・ヘス(Ilse Hess)夫人とのインタビューでの発言についての、次のような指摘である(同書の脚注23)：すなわち、「ハウスホーファーの地政学の授業は、私の夫の戦略的思考の上に、重大でかつ持続的な効果を与えたのです」と。
- (31) ハウスホーファーが1924年以来続けてきた、このバイエルン・ラジオ放送の月例講話、ならびに、この報告者の中立性が欠如しがちであるために、一時この放送から解任されたとき(1931年)に起こった反応の大きさは、ハウスホーファーの地位を証明している。興味深いのは、ベルリンの現代史出版社(Zeitgeschichte-Verlag)のヴィルヘルム・アンダーマン(Wilhelm Andermann)の評価である。この人は、ハウスホーファーに宛てた1939年9月11日付けの書簡の中で、そのことについて「数百万人のラジオ聴取者があなたのことを知っている」と語っている。これについては、H.A.ヤコブセン「カール・ハウスホーファー」(注7に同じ)、第1巻、183頁、および第2巻、117-121頁を見られたい。
- (32) ヒュブナー(H.W. Hübner)「野戦行動から戦争へ(I)」, [週刊

新聞]ディ・ツァイト (Die Zeit), 24号 (1991年6月7日)、38頁。ヒュブナーは、1941年のソヴィエト連邦への奇襲攻撃直前の彼の経験について述べる。ドイツ軍のパレードの行く先は何処に向かうべきなのか、をめぐって流布していた様々なうわさ話の中で、ヒュブナーは特に次のような話を取上げる:「ハウスホーファーの話を読んだことのある人が、地政学の講演をやったとき」という話。これは、ハウスホーファーの教えがいかに広く拡がっていたか、を示す証拠に値するだろう。

- (33) これらの人間関係がドイツの対東アジア政策に対してどんな意義を持つのか、という点についての探求は、著者自身、今後の研究課題として予定しているので、ここではこれ以上取り扱わないことにしておく。一体、ヘスはドイツの東アジアとの関係の中で、どの程度の役割を果たしたのか、という問題については、未だかつて照明が当てられたことが無かった。ヒトラーの日本イメージについては、ベルント・マルティン (Bernd Martin) の研究があることだけ、ここでは指摘しておく。フォン・リップントロップの役割については、ミヒャルカ (W. Michalka) の「リップントロップと1933-1940年のドイツ世界政策」(München 1980年)が、今のところ研究水準を代表している。
- (34) アルブレヒト・ハウスホーファーについて立ち入って取上げることは、ここでは紙数の関係で断念せざるを得ない。A.ハウスホーファーの成長過程やその政治的活動については、とりわけウルズラ・ラーク=ミヒェル (U. Laack-Michel) 女史の「アルブレヒト・ハウスホーファーと国民社会主義 [ナチス]」(Stuttgart 1974年)を重要文献として指摘すべきであろう。
- (35) オスカー・リッター・フォン・ニーダーマイヤー (Oskar Ritter von Niedermayer) は、ハウスホーファーと同様、第一次世界大戦当時パイエルン軍の将校であった。そして彼もまた、同じミュンヘン大学 [地理学研究室] のドリガルスキー教授のもとで博士の学位を取り、中近東の専門家として知られていた。ニーダーマイヤーについては、次の文献を参照: ヤール (C. Jahr), 「陸軍中將オスカー・リッター・フォン・ニーダーマイヤー」, ユーバーシェール (G.R. Ueberschar) 編「ヒトラーの軍事エリートたち。第一巻: 体制創始期から開戦まで」(Darmstadt 1998年) 所収、178-184頁。
- (36) ハウスホーファーの国防軍に対する東アジア報告書類については、BA コブレントツ, NL 1122, 第26巻, を参照。1922年1月7日付けの書簡で、軍務局長は、東アジアに関する報告書の執筆について、ハウスホーファーの協力に対する感謝の意を表明している。同じ箇所の、第22巻にあるハウスホーファー宛の1922年11月11日付けの書簡で、ミヒェリス (Michaelis) は、国防軍がインフレーションのために東アジア関係諸雑誌の購入継続が困難になったこと、これに伴ってハウスホーファーへの報告書の執筆依頼も出来なくなったこと、を通告している。これとの関連で興味深いのは、ヴェルナー・フォン・ブロンベルク (Werner von

Blomberg) の外交政策上の考え方である。この陸軍相 (1933-38年) は、その回想記に記した、「自分は「アングロ・アメリカに対抗するユーラシア・ブロック」に組み込んでいる」という注記が証拠づけているように、明らかにハウスホーファーの [大陸ブロック] テーゼに賛成する立場をとっていた。連邦文書館/フライブルク軍事文書館 (以下「BAMA フライブルク」と略称)、N 52 (ブロンベルク遺文書)、第3巻、68頁以下、参照。また、注目に値するのは、1923年12月、ベルリンにおいて日露間で行われた秘密交渉、—これは結局具体的な成果を得るには至らなかったが、—にハウスホーファーが参画していることである (H.A. ヤコブセン (注7と同じ)、第1巻、221頁以下および471頁)。これは第一次大戦後における公認の東アジア専門家としてのハウスホーファーの地位を証明する記録である。ハウスホーファー自身の申し出、ならびにブロックドルフ=ランツァウ (Brockdorff-Rantzau) 外相と日本の交渉団代表の両者から提案された、仲介者としてのハウスホーファーの役割は、彼の大陸ブロック構想にぴったりと照応するものであった。ヘスケ、ヴェッシュェ (H. Heske & R.J. Wesche) 共著、カール・ハウスホーファー 1869-1946, in: *Geographers Biobibliographical Studies*, 第12巻 (1988年)、96頁、は、ハウスホーファーが、このように特に外交政策の世界に引き込まれていったことを、彼が政治の世界においてドイツ第一級の日本専門家として認知される度合いが強まった証拠とみている。

- (37) 「地政学雑誌」(ZfG) については、ハーベック (K.-H. Harbeck) 「“地政学雑誌” 1924-1944年」(Kiel 1963年) を参照。ハーベックは、その15頁で、発行部数の10%が国外の図書館へ行ってたと確認している。しかしハーベックは、16頁で、結局のところ「重要なのは、購読者について熟慮することであって、部数を数えることではない」と結んでいる。なお、この雑誌の共編者には、1930年代の初頭まで、ヘルマン・ラウテンザッハ (Hermann Lautensach)、オットー・マウル (Otto Maull)、エーリヒ・オブスト (Erich Obst) らの地理学者が入っていた。
- (38) ミュンヘンの現代史研究所 (Institut für Zeitgeschichte (以下IfZ ミュンヘンと略称)) 史料室のハウスホーファー遺文書、MA 619 参照。このリストアップは、1942年5月1日付けのハウスホーファーから当時のミュンヘン独日協会会長ヴェスト (W. Wüst) 教授宛の書簡に由来するものである。それ以外に、ハウスホーファーは、ドイツ東アジア自然学・民族学協会 (OAG) の“審査委員会”のミュンヘンでの指導者であった。今日に至るまで、このOAGの歴史についての包括的記述が存在しないので、この“審査委員会” (Vertrauensausschüsse) なるものが、ドイツで一体どのような役割を果たしたのかについては、今のところ不明である。
- (39) ハーガー (H. Hager) 「創造者 (注(19)参照)」、17頁:「もしもドイツの極東との諸関係が(中略) (第一次大戦の後、著者 C.W.S. の注) 再び極めて急速に正常化したとするなら、それには少なからずハウスホーファーの功績が貢献して

- いと評価しても良いであろう。』
- (40) BA コブレンツ, NL 1413, 第5巻。1941年に書かれたハウスホーファーの手稿のうち、自分の履歴についての下書きの中で、ルードルフ・ヘスとの外国研究上の関係、および個人的な関係に関連して、次のような記述が4頁目に出てくる：「しかし何よりも、日本人たちがまたやって来たのだ、そして、ドイツに立ち寄った重要な日本人で、私のところに訪ねて来なかったような人は、まずほとんどいなかったであろう、ということが解ったのだ」と。
- (41) 同じ箇所, NL 1122, GD 2859。少し以前だが、1938年11月7日付けの書簡の中で、大島はハウスホーファーから来た大使就任への祝賀状に感謝して、「私は貴下からの親愛なる書簡を込み上げる歓喜とともに読みました。それがひとりの著名な学者であり、最良の東アジア専門家であり、かつ最高の見識と誠実さを具えた日本の友人から送られてきたものであったからです」と書いている。
- (42) ハウスホーファーが外交政策の諸問題に取り込まれるようになったことについての一つの指標として、1934/35年の「フェルキッシャー・ベオバクッター(Völkischer Beobachter)」紙上における彼の名前の登場頻度を挙げることが出来る。この両年を合わせて、著者が認めた限りにおいて、彼による、ないし彼に関する論説およびノートが8編も同紙上に出現している。これはその前後の年の平均的状況に比べて多いことは明らかである。
- (43) BA コブレンツ, NL 1122, 第127巻。ハウスホーファー夫妻の日記によれば、彼が1935/36の両年しばしばベルリンに滞在していることが証明される。とりわけ興味があるのは、マルタ・ハウスホーファー夫人の1935年7月の日記の中に、ハウスホーファーがヘスの家族と親しい関係にあること、ならびに、フォン・リップントロップのために助言者の役割を果たしていたことを証拠づける、次のような記述を発見したことである：「(1935年7月12日)早朝の7-8時頃、フェーリング(Föhrling)地区に行く。(R(リップントロップ)から到着の旨報せがあったのに、K(カール)が出かけたくないと言うので)。(中略)9-10時頃、カールが散歩に出かけて、丁度留守になっていたところへ、折悪しくリップントロップから電話がかかったらしい。批難、そしていやな気分。(1935年7月13日)リップントロップはもう電話を掛けてはこない。ヘス夫人に電話する。彼は既に旅立ったことが解る。カールがひどく怒る。(1935年7月14日)朝、Alb.(アルブレヒト)に電話する。リップントロップに連絡をとるよう依頼。うまく行く。(中略)ヘス夫人より電話、カールに、明日ではなく今日直ぐに出发するようにとの伝言。(1935年7月17日)9時半頃カールがベルリンから帰宅。ベルリンには丸々2日滞在したわけで、仕事の結果については、まあまあ満足だった由。」
- (44) カールおよびマルタ・ハウスホーファーの全旅行期間は、1908年10月19日から1910年7月15日までであった。そのうち二人が日本にいたのは、中断期、つまり朝鮮と中国への旅行期間を含めて、1909年2月20日から1910年6月12日までであった。
- (45) 最近では、竹内啓一が、その論文“アカデミック地理学の凋落と再生”(注の(10)参照)の75頁の注31、の中で、ハウスホーファーが1909-1911年の間、日本駐在の陸軍武官(Militärattaché)であったことを前提として取り扱っている。
- (46) IZ ミュンヘン MA 1423-2。ここには、ハウスホーファーの日本派遣に関する1908年10月30日付けの服務規定、第20719号が保存されている。そこには、第4点として、「派遣の目的は、単に日本の軍隊装備の研究である」と書かれている。
- (47) ミュンヘン軍事文書館, M Kr. 2164。「日本将校の芳名録」には、1890年から1913年の間にバイエルン王国に関係した、合計29人の将校ないし軍医官の名が掲載されている。このリストの中には、とりわけ次のような名前が出てくる：a) 1896年：大島砲兵少佐、おそらくこれは大島浩の父君の大島健一のことではないであろう。その人ならば、日本の人名辞典等の記述では、既に1890年にドイツに来ていたからである。b) 1898-1900年：大場大尉、この人のところには、後で1909年ハウスホーファーが訪問している。c) 1907/08年：渡辺錠太郎大尉、この人は1936年2月の[二・二六]事件で暗殺された。d) 1907年：高級軍医の葛西博士、この人はしばしばハウスホーファーの自宅を訪問している(BA コブレンツ, NL 1122, 第155巻)。これに対してハウスホーファーも、後にこの人を訪問している。マルタ・ハウスホーファー夫人の未公開の旅行日誌の493頁と508頁によれば、それは1909年10月6日、大連のことであったという。これらの点について、ハウスホーファー一家のご家族が、著者のこの調査研究のために、わざわざ日誌を提供されたり、好意的な援助をして下さったことに対し、この場をかりて感謝いたしたいと思います。
- (48) これについては、マルタ・ハウスホーファー夫人の旅行日誌を参照。その202頁(1909年3月2日)、231頁(1909年3月27日)、239頁(1909年4月4日)、および508頁(1909年9月6日)において、彼女は来日以前のミュンヘン時代から日本人と接触があったことを指摘している。一例として、ここでは1909年3月27日(231頁)の記述を引用しよう：「K[カール]は後で、彼とはミュンヘン時代以来の知合いであった将校たちを訪問した(大場と奈良)」と。
- (49) ここでは、例えば、ハウスホーファーと友人関係にあった菊池武夫男爵(後述の注(71)を見られたい)や、後の陸軍大臣(1916-1918年)・貴族院議員(1920年6月-1940年4月)・枢密院顧問官(1940年4月-1946年4月)であった大島健一の名前を挙げておこう。
- (50) マルタ・ハウスホーファー夫人の旅行日誌(注(47)に同じ)、3-5頁。
- (51) ミュンヘン軍事文書館, M Kr 2161, には、この時の応募者として約20人の名前が出ている。
- (52) マルタ・ハウスホーファー夫人の旅行日誌(注(47)に同

- じ)、4頁。ハウスホーファー夫妻は、1907年2月全く偶然の機会に、ハインリヒ・ルクスブルク伯爵(Graf Heinrich Luxburg) (この人は日本旅行の際、しばらく夫妻と同行したことがある)から、この募集公告のことを聞き知ったのである。
- (53) ミュンヘン軍事文書館、参謀本部 322。陸軍省から参謀総長フォン・エンドレス(von Endres) 中将宛の1907年3月25日付けの書簡(第5422号)の中で、フォン・ホルン(von Horn) 男爵は次のように述べている:「私は、シェルフ大尉がこのこと(日本派遣のこと、著者C.W.S.)について特に適格であると確信しておりますが、それにもかかわらず、この将校の派遣については、目下のところ遺憾ながら同意し得ないことを表明せざるを得ません。それは、騎兵師団の参謀将校として、彼に代わり得る能力を持った申し分のない交替者が欠如しているため、彼を手放すわけには参らぬからであります。しかし(中略)ハウスホーファーが(中略)提案されましたので、この派遣のための候補者として(中略)後者の方を予定するという件につき、閣下のご同意が得られますように、ご好意あるお言葉を戴けますようお願い申し上げます」と。
- (54) 同じ箇所、参謀本部 322。バイエルン王国陸軍省の1907年2月9日付け回覧状「バイエルン軍将校の日本派遣に関する件」には、特に「一年の継続期間が予想される外国派遣のような場合の前提条件としては、(中略)派遣任務の目的のために要する、およそ10000-12000マルクの費用を、派遣者が自己資力で支出し得るに足る資産事情を持つことが要求される」と書かれている。
- (55) 同じ箇所、M Kr 2161。バイエルン陸軍省宛の1908年3月26日付けの書簡で、ハウスホーファーは「自分の妻の言語学習程度が、自分自身の場合よりも著しく先に進行しているので、妻を派遣に同行させる件の許可を是非とも認めていただきたい」と請願している。この請願は最終的に認められた。
- (56) マルタ・ハウスホーファー夫人の旅行日誌(注(47)に同じ)、5頁以下。
- (57) シュテファン・ツヴァイク(S. Zweig):「昨日の世界」(Frankfurt a.M. 1947年)。その220頁でツヴァイクは、ナチス・イデオロギーに対してハウスホーファーの果たした役割について、次のようなコメントを付けている:「ヒトラーよりも、もっと極端に粗暴な相談役達をして、国民社会主義(ナチス)の攻撃的な政策を、無意識にか意識的にかは知らぬが、狭いナショナルなものからユニバーサルなものへと駆り立てさせる、という役割を果たしたのが、彼の理論であったことは、疑問の余地のないところである」と。
- (58) ([1899-1902年の]ブーア戦争において非人道的な処置方法をとったという事件に巻き込まれたために)論議の対象になっていたキツェナー氏との対話について、ハウスホーファーは何度も繰り返し話題にしていた。ハウスホーファーの伝記的なスケッチ:キツェナー、「コールマン小伝記集」(Lübeck 1934年)をも参照。
- (59) マルタ・ハウスホーファー夫人の旅行日誌(注(47)に同じ)、550-559頁には、京都郊外の(泉涌寺の並びの内に)ある法音院のかたわらにあった家についての記述が見られる。
- (60) 元老というのは、明治天皇(1868-1912年在位)によって任命された、政治上の諮問に当る数人の人々のことで、およそ1922年頃まで、日本の政治を支配する存在であった。
- (61) R.ゴットシュリヒ「ドイツ帝国...」(注(8)に同じ)、128頁。「彼(ハウスホーファー、著者C.W.S.)は、自分の主義として、親友関係に祭り上げていた個人的な知人を、日本の権力エリートの最先端に位置する代表者たちなのだ、と自慢の種にしていた。」
- (62) このリストは、カールとマルタ・ハウスホーファー夫妻の両者によって作成され、その後、彼らの家族によって、今日に至るまで[旧来の自邸であった]ハルトシムメルホーフ(Hartschimmelhof)に保管されている「家族記念帳(Familien-Stamm-Buch)」の56頁以下に見いだされる。
- (63) ハウスホーファー以外にも、日本に来ていたドイツ人としては、広汎な経済界の代表者、科学者、外交官、あるいは軍人など、多数の人々がいた。しかし、ハウスホーファーほど、日本のことを直接的に良く知っていて、さらに後年、日独間の協力をそれほど明確に擁護した人は、他にはいなかった。
- (64) BA コブレンツ, NL 1122, 各所に(passim)。大使館関係者からの書簡の大部分は、第155巻およびGD 2859の中にある。ハウスホーファーの通信相手としては、上記の人々の他、特に武器担当アタッシュェ(Waffenattachés)として来ていた、坂西(バンザイ)、香椎、河辺、遠藤、横井らがいた。菊池は1935年1月12日付けの、ハウスホーファー宛の書簡(同所、第155巻)で、彼の日本陸軍への継続的接触について次のように認めている:「私は、後輩の多くの軍人達がしばしばミュンヘンを訪ねて、あなたのところで非常に多くのことを教えて頂いていることを、心から感謝致しております」と。
- (65) 同所, NL 1122, 第111巻。ここで指摘しておきたいのは、大島からハウスホーファー宛の1934年11月13日付けの書簡である。その中で大島は、「パンフレット」を受け取ったこと、および、「ご希望に添って、(中略)これを直ちに東京の陸軍省に転送し、あなたから私の方へお申し越しの通り、荒木大将閣下、菊池中将閣下、植村中将閣下、遠藤海軍大佐殿などに、それぞれ一部づつお渡しするようにという注記を付けておきました。その残りの分は、日本の将校で、(中略)ドイツに特別な関心を有する者たちに配布されるよう、私からわが陸軍省の方へ依頼しておきました」と報告している。
- (66) ハウスホーファーは、自分の著書「日本は帝国を建設している」(*Japan baut sein Reich*, Berlin 1941年)を菊池武夫、上村竜平、および大島浩宛に、「私の日本の友人たちの内でも最も誠実な方へ」という献辞を付けて贈呈している。



- (67) 大島浩については、次の文献を参照：ボイド(C. Boyd), *The Extraordinary Envoy. General Hiroshi Oshima and Diplomacy in the Third Reich 1934—1939* (特命公使。大島浩将軍と1934—1939年の第三帝国における外交), (Washington 1980年)。ただ、この本には、大島とハウスホーファーの関係について特に新しいことは出てこない。また、1941年まで合衆国からのベルリン特派員だったシャイラー(W.L. Shirer)は、著書 *The Rise and the Fall of the Third Reich* (第三帝国の興隆と凋落), (London 1991年, ©1959年), 872頁、の中で、「大島は(中略)本物のナチスよりもっとナチス的な人として、しばしばこの観察者(シャイラーのこと、著者C.W.S.)を印象づけた」と書いている。
- (68) 大島は、ハウスホーファー宛での1924年6月26日付けの書簡で、彼の著書「南・東・アジアにおける自己決定」(おそらく、ハウスホーファーがメルツ(J. März)と共に著した著書「自己決定の地政学について」のつもりであろう)の送付に感謝して、「この本は、あらゆる関係にわたって私を引きつけました」と書いている(BA コブレンツ, NL 1122, 第24巻)。また大島は、1939年1月12日、ハウスホーファーの著書「境界の地理学的・政治的意義」(Berlin 1927年, 第二版は1939年)(同所, 第66巻)の寄贈に対して礼状を送っている。マルタ・ハウスホーファー夫人の日記の1942年4月3日の記入によれば、「(ハウスホーファーが、著者C.W.S.)彼の古くからの友人である大島大使の賓客として(中略)、特別に丁寧な扱いを受けた」と述べている(同所, 第127巻)。
- (69) 著者の知るかぎりにおいて、日本地政学協会に関しては、これまで詳細な研究は全く存在しない。
- (70) 極東軍事法廷で行われた証言の一部に誠実に欠ける点のあること、に対するまさに古典的な一例を提供するものとして、対コミンテルン協定についての大島浩の発言が挙げられる。クレーブス(G. Krebs), 「日本の対ドイツ政策1935—1941年」第2巻(Berlin 1984年)の35頁(その注67)には、1971年に行われた大島とのインタビューが取上げられているが、その際大島は、極東軍事法廷の場においては、自分が果たした役割を、すべてにわたって出来るかぎり小さく表現しようと試みた、と述べたという。
- (71) 菊池は1909年、京都でハウスホーファーと同じ連隊に駐在していたことがあり、その後1919年、ドイツでハウスホーファーを訪問している。菊池からの書簡は多数保存されており、その一部にはハウスホーファーの手で赤い星印あるいはハート印が付けられている。これらの書簡の個人的な内容から察するに、ハウスホーファーと菊池とは、割り合いに親密な友人関係にあったことがうかがわれる。1919年12月29日付けの書簡(BA コブレンツ, NL 1122, 第155巻)で、菊池は、自分が日本へ帰国した後には、三ヶ月ごとに、「日独関係において望まれることについて」自分の見解をハウスホーファーに報告することにしよう、と書いている。[第二次世界]大戦の後、菊池は、「国体」イデオロギー(注(87)を参照)をめぐる論争に関与したとい
- うかどで、まず、—ハウスホーファーの場合と同様—主要戦争犯罪人として拘禁されたが、その二年後に釈放された。
- (72) BA コブレンツ, NL 1122, 第127巻。マルタ・ハウスホーファー夫人の日記の1934年7月6日の欄には、次のような書き込みがある：「[ミュンヘンのホテル] 四季での遠藤海軍武官のお別れの食事の後、午後一時頃、彼は日本へ帰って行った。少人数の会で(中略)常ならぬ、暖かみ心のこもったお話、遠藤氏を囲んでの内輪の気持ちのいい歓談でした」と。
- (73) 同所, NL 1413, 第5巻。上述のハウスホーファーの手稿、履歴の下書き(注(40)に同じ)の中で、彼は、片や2頁では、平沼の助言者としての菊池について取り上げるとともに、他方8頁では、1934年4月7日のヘスと遠藤の会見について、次のように報告している：「総統代理と、当時の海軍武官、後の侍従武官かつ提督で現在横須賀の艦隊司令長官である遠藤との、最初の半公式的な接触は、拙宅における“偶然の”お茶の会という形で開催された。言うまでもなく、以前から私が保証しておいたように、これは総統の承認を得たものであった」と。
- (74) 同所, NL 1122, 第155巻。遠藤からハウスホーファー宛の1934年4月10日付けの書簡。
- (75) この日本海軍の持っていた関心のありかについては、BA/MA フライブルクの若干の記録からも明らかにされる。この文書館の所蔵文書RM 20/1635には、「秘密幕僚事項。(Geheim.Stabssache)と記された27頁の書類で、カナリス(Canaris)海軍少佐が書いた日本旅行(1924年5月17日から9月10日まで)の報告書が含まれている。その4頁には、アラキ(Araki: 漢字は不明)艦長から聞いた「独日海軍間の秘密協定について」のスピーチが出ている。また、その18頁でカナリスは、「[日本の]海軍が、ドイツの経験やドイツの製品を大いに取り入れようとする傾向を持っていることは疑問の余地が無い」と解説している。もっとも、カナリスはドイツに対する日本側の考え方について、「ドイツと共に利益共同体を組むためには、ドイツ側を見る日本の眼の中に、必要な前提条件、つまり同盟を担う能力、が欠けている」と見ている。1930年代の中ごろになって、このような問題がもはや存在しなくなった後に、具体的なコンタクトを持つ事になったのである。同所, RM 8/1600。ここには、「航空母艦“赤城”の研究のためのドイツ日本委員会(1935年9月9日より同年12月23日まで)報告書(報告書発行、1936年1月7日)がある。ある覆面の海軍委員会が“赤城”の演習航海に同乗し、かくして作戦行動下における航空母艦の技術を学習することが出来たという。ドイツ海軍は、計画中の独自の母艦を建造する場合のために、そこから利点を獲得しようと希望したのである。
- (76) BA コブレンツ, NL 1122, GD 2859.
- (77) 同所, NL 1122, 第19巻。窪井はここでハウスホーファーに、その著作「大陸ブロック論」をすべての日本人々々

に受け入れ易くするために、その翻訳を承諾してくれるよう依頼している。[その後まもなくドイツが] ソ連に奇襲をかけたことを見れば、これは少し遅すぎで無駄になってしまったわけである。それにもかかわらず、この小冊子は1942年、佐藤荘一郎によって翻訳された。

- (78) これについては、次の文献を参照：日本近代史料研究会編「亀井貫一郎氏談話速記録」（東京1970年）、190頁以下および199-202頁。
- (79) BA コブレンツ, NL 1122, GD 2859. この亀井の意図は、そのハウスホーファー宛の1938年2月12日および19日付けの書簡によって証明される。もちろん、ハウスホーファー宛の亀井の書簡が他にもあったことを、ここで除外しようというわけではない。注目に値するのは、彼が自身で作成し、「嚴重内密かつ極秘」と注記した「影響力を持ち、かつ恐らく積極的協力の可能性(Einsatzbereitschaft)を持つ日本の人物一覧リスト」の亀井の部分に、ハウスホーファーが加えたコメントである：「ナチス党日本分派代表」（同所、第125巻）と。
- (80) これについては、竹内啓一、「日本におけるゲオポリティークと地政学」、「一橋論叢」第72巻2号(1974年)、176-182頁；同、「日本における地政学と地理学の再検討」（注(10)、1980年）19-23頁、および、同、「日本の帝国主義的伝統……」（注(10)、1994年）195-204頁、を参照。[この点末尾の「訳者あとがき」参照]
- (81) 上田良武中将が、どの程度（地）政治学についての理解を持っていたか、また彼のドイツとの関係について、著者は今のところ特段の材料を持っていない。
- (82) 飯本は、ハウスホーファーが信じていたのとは違って、東京大学教授だったのではなくて、東京にある現在のお茶の水女子大学の前身の、東京女子高等師範学校の教授であった。彼は日本の地政学を代表する人々のうちでも、少数しかいなかった学界出身者の一人であり、彼のことはハウスホーファーも良く知っていた。ハウスホーファーが、[ドイツの「地政学雑誌」(ZfG)の発行者であった]クルト・フォーヴィンケル(Kurt Vowinkel)宛ての1939年8月22日付け書簡(HfZ ミュンヘン, MA 1423-1)で、彼に対して述べた意見表明を見ると、もともと「ZfG」のハウスホーファー70歳誕生日記念特集号(ZfG, 16.Jg., 8/9(1939年))に、飯本教授からの寄稿が予定されていたことを、明らかに読み取ることができる。何故にこれが実現されなかったのかという点については、なお不明である。また、BA コブレンツ, NL 1122, 第125巻をも参照。すでに上で引用した[注(79)]「影響力を持ち、かつ恐らく積極的協力の可能性を持つ日本の人物一覧リスト（中略）」において、ハウスホーファーは、飯本に関する注記として、「地政学の後援者」とコメントしている。同所の、GD 2859.をも参照。ここには飯本からの1938年2月9日付けの書簡が保管されており、その中で飯本は、まず第1に、自分がドイツ語を非常に良く理解できること、第2に、何時からか（つまりおよそ1924年頃）以来、日本でハウスホーファーのこ

とを科学者として知っていたこと、そして第3に、彼が1938年にはドイツに滞在しているため、ハウスホーファーに会見したいと希望していることを述べ、次のように書いている：「あなたの価値多き著書や雑誌論文の研究を通して、私はあなたの誠実な崇拜者となりました。この14年来、あなたに会ってあなたとお話したいと切望しております。（中略）尊敬する教授殿、もしもあなたにお暇があつて、私を迎え入れて下さるならと切に望んでいるのです」と。もしも実際にこの出会いが行われていたのであれば、これはひょっとすると[ドイツの]地政学研究共同体(AfG)の構成に関する情報を届ける道すがら、日本まで到達し得ていたかも知れないのである。

- (83) 竹内啓一、「日本における地政学と地理学の再検討」（注(10)、1980年）、22頁。ここで竹内は、日本地政学協会の会員数にも言及している。
- (84) 竹内の著者への談話によれば、「京都学派」と日本陸軍の計画担当幕僚との密接な共同作業について、明白な発言と示唆が存在することは確かであるが、記録は特に存在しないという。これに該当する書類は、恐らくは戦勝国の進出以前に、廃棄処分されてしまったものと思われる。
- (85) 小牧実繁、「日本地政学の主張」「地理論叢」第11号(1940年)、3-6頁。ここで引用したその英語訳は、竹内啓一、「……再検討」（注(10)、1980年）20頁、による。小牧は1938年から洪水のように次々に公刊する出版物によって、彼の考えている純日本的地政学の構想を世間に発表した。この「純日本的」地政学は、例えば、いわゆる「日本地政学宣言」(1940年)というような、巧みなタイトル付けによって、より一層成功を収めることになった。小牧の業績についての包括的な一覧表が、次の文献に掲載されている：ジョー(Y.-H. Jo), *Japanese Geopolitics and the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere* (日本の地政学と大東亜共栄圏), (Washington 1964年)、273頁。
- (86) 日本地政学協会とハウスホーファーとの結びつきについての例証としては、上の注(82)で言及した、協会の常務理事と元将軍との接触が挙げられる。
- (87) これについては、アントーニ(K. Antoni), 「コクタイ [国体]—日本のユートピアとしての「国家の本質」」、同編「天与の支配者(Der himmlische Herrscher)とその国家」(München 1991年)、31-59頁、を参照。
- (88) BA コブレンツ, NL 1122, GD 2859. 一例として、佐多教授からハウスホーファー宛の1933年7月12日付けの書簡がある。その中で彼は、ハウスホーファーの著書「日本の世界強国かつ帝国としての生成過程」を受け取って、「私はこれにひとかたならず興味を持ちました。（中略）私はあなたの小冊子を、あらゆるドイツ語を読む日本人に、心から推薦したいと思います」と書いている。
- (89) これについては、文献リストにあげられている関連論文を参照せよ。大原(J. Ohara)は、1922年3月1日付けの書簡で、大阪毎日に特定の論文が到着したことを言明している。
- (90) 竹内啓一は、「……再検討」（注(10)、1980年）、17頁

- で、地政学的思想内容についての印刷された最初の典拠として、1925年に雑誌に出た藤沢(M.F.)のチェレーン(Rudolf Kjellén)の著書の書評に言及している。また、ハウスホーファーの著作も、すでに早くから書評の対象になっていたことは、大阪朝日・東京朝日の特派員であったオカノウエ(M. Okanouye)の1926年12月21日付けの書簡が示している。その中で彼は、ハウスホーファーの著書「東アジアにおける自由の闘い」を持っており、「今週の終わりには、その書評を日本の方に送るつもりです。(中略)あなたの新しい著書も日本で普及することになるでしょう」と述べている。これについては、BA コブレutz, NL 1122, GD 2859. を参照。なお、ハウスホーファーは、このような題の著書も編書も出していないので、恐らく彼は、ハウスホーファーが共編者の一人となっている「自己決定の地政学について」(1923年)のことを言っているのだ、と受け取っても良いであろう。
- (91) これについては、飯本信之の“人種争闘の事実と地政学的考察”、「地理学評論」第1巻(1925年)、852-873頁、955-967頁、および第2巻(1926年)、40-60頁、ならびに、同、“いわゆる地政学の概念”、「地理学評論」第4巻(1928年)、76-99頁、を参照。
- (92) 小牧実繁の京都帝国大学における前任者、元地理学教室主任教授であった石橋五郎(1927年)と小川琢治(1933年)は、ともに地政学に対立する批判的見解の持ち主であった。しかしながら、彼らはこの新しい指向から完全に離反していたわけでもなかった。
- (93) 竹内啓一は、“・・・再検討”(注(10)、1980年)、22頁で、特に次の2文献のことを指摘している：陸軍士官学校教授であった渡辺光の論文、“いわゆる地政学の内容と将来性”「地政」第9巻(1942年)、44-50頁、および、東京商大教授であった佐藤弘の著書「政治地理学概論」(東京、1939年)、324-328頁。
- (94) 1939年から1942年までの間に、次のようなハウスホーファーの諸著作(a-g)が日本語に翻訳された：(a)「地政治学の基礎理論」(*Bausteine zur Geopolitik*) (2回)、(b)「太平洋地政治学」(*Geopolitik des Pazifischen Ozeans*) (3回)、(c)「世界海洋と世界強国」(*Weltmeere und Weltmächte*)、(d)「古-日本/日本の帝国革新」(*Alt-Japan/ Japans Reichserneuerung*) (ゲッセン文庫版2冊の翻訳集成本)、(e)「大日本」(*Dai Nihon*)、(f)「日本の国家建設」(*Japan baut sein Reich*)、(g)「大陸ブロック論」(*Der Kontinentalblock*) (2回)。同じ著作が何度にもわたって翻訳されたのは、恐らく日本における地政学研究の中心が二つに分れていたことに関係するのであろう。もう一つ指摘しておかねばならないのは、石橋栄・木村太郎訳編によりハウスホーファーの論文を集成した「大東亜地政治学」(東京1941年)が出ていることである。
- (95) 浅野利三郎著「日独大陸ブロック論：その地政学的考察」(東京1941年)。浅野の本の題名は、ハウスホーファーの著作「大陸ブロック論」(Berlin 1941年)との密接な親近性を示している。浅野の(地)政治学的見解やその職業に関して、著者にはこれ以上の情報が見出せなかった。
- (96) 佐藤莊一郎著「ハウスホーファーの太平洋地政学解説」(東京1944年)。
- (97) 証拠としては、例えば、1933年の国際連盟からの脱退が挙げられる。竹内啓一は、“・・・再検討”(注(10)、1980年)、17-19頁において、日本で地政学が積極的に受け入れられた前提条件として、その当時の日本に反西歐的な気分が横溢していたことを強調している。
- (98) 福嶋依子は、“日本の地政学とその背景”(注(10)、1997年)、408-413頁で、日本の地政学と「大東亜共栄圏」のための諸計画立案との間の相互的影響の問題に触れている。
- (99) 福嶋は、同所、408-413頁で、東大の蠟山政道教授、および東京商大(現一橋大学)の江澤譲爾教授の役割を強調している。レブラ=チャプマン(J.C. Lebra-Chapman)編、*Japan's Greater East Asia Co-Prosperity Sphere in World War II. Selected Readings and Documents* (第二次世界大戦下における日本の大東亜共栄圏—主要論文・記録抜粋)、(London 1975年)は、その第4章(20-24頁)で、蠟山の当該構想からの抜粋を引用している。「昭和研究会」と蠟山の役割については、フレッチャー(M. Fletcher)著、*Search for a New Order. Intellectuals and Fascism in Prewar-Japan* (新秩序を求めて一戦前の日本における知識人とファシズム)、(Princeton 1982年)を参照。これに対して、同じように昭和研究会のメンバーであった亀井貫一郎については、フレッチャーはほんの少ししか触れていない。

### [訳者あとがき]

この論文の著者クリスティアン・W・シュパング(Christian Wilhelm Spang)氏は、1968年生れ、近現代史・英語学・中世史を、エアランゲン・ダブリン・フライブルク各大学で専攻、1997年フライブルク大学で「ナチスの日本像とその形成におけるカール・ハウスホーファーの役割」の研究でMAを取得、ひき続き同大学歴史学のベルント・マルティン教授のもとで「日独におけるハウスホーファーの大陸ブロック理念の受容」というテーマで博士課程の研究に従事している。1998年10月から2年間、日本の文部省とドイツのDAADの奨学金を受け、東京大学歴史学研究室に研究生として滞在した後、2000年10月からは、国際基督教大学アジア文化研究所の研究助手として日本に滞在中である。

著者には、ここに訳出した論文の他、次の2論文がある：

・ Karl Haushofer und Japan. Der Einfluß der Kontinentalblocktheorie auf die Japanpolitik des 'Dritten Reiches' (カール・ハウスホーファーと日本. その大陸ブロック理論が「第三帝国」の対日本政策に与えた影響). In: Hilaria Gössmann et al. (Hrsg.), 11. Deutschsprachiger Japanologentag in Trier 1999, 2 Bände, Hamburg-Münster: LIT-Verlag, 2001. (Ein Beitrag zum 11. Deutschsprachigen Japanologentag, 15.-18. Sept. 1999 in Trier.)

・ 日独関係におけるカール・ハウスホーファーの学説と人脈 1909- 1945. 『現代史研究』 2000 年第 46 号, 35-52 頁 (中田潤訳). (現代史研究会 377 回例会報告, 1999 年 11 月 13 日, 於青山学院大学).

訳者は歴史学の方法には不案内であり、翻訳担当者として適任ではないのだが、もともとこのテーマには興味があつて、関連文献を集めたり、故ペーター・シェラー教授が来日するたびにこの問題をめぐって話し合ったりしていたので、本誌の編者からこの翻訳を勧誘された時、つい引き受けることになった。あまり準備もないままの忽々の間の翻訳作業であつたので、

拙劣・誤解無きを期しがたい。間違いや不正確な点があれば、ぜひご指摘をいただきたい。

なお、本文中の斜体部分、および雑誌論文の題目は“ ” で囲んである。また、角括弧 [・・] 内は訳者の付けた補足である。日本人の名前の漢字標記や、戦前・戦時中の日本での翻訳や解説出版物の題名・著訳者名等については、正確さを充分には確かめられなかった。また、訳文の仕上げ段階で格別の協力をいただいた石川桂子氏、中田潤氏には、とくに感謝の意を表したい。

最後に、第 6 章冒頭で、京都と東京の「両帝国大学の地理学教室」に日本地政学のセンターが形成されていた、と著者は記しているが、東京側の中心は日本地政学協会であつて、地理学教室は事実上無関係であつた。大戦末期そこに在学していて多少実情を知る者の一人として、誤解を避けるため一言させて頂いた。

2001 年 1 月 3 日

訳者 石井 素介 識